沖縄諸島における「町」の形成

朝岡康二

一　はじめに
二　那覇の空間構造
三　首里・那覇の「マチ」
四　那覇・首里の「マチグァー」
五　那覇のマチヤ
六　石垣・四個の移住民と商工の展開
七　記憶のなかの石垣
八　石垣四個の明治・大正時代の商店
九　まとめにかえて

論文要旨

本稿は、南島における近代的な意味での都市の形成を、商業区域の成立の側面からみていこうとするものである。

比較的に早くから王権が発達して、国際交易の要衝となった沖縄本島の場合、首里・那覇・泊が早くから都市的性格を獲得していたが、これにはいわゆる商業地区の形成が伴わなかった。そして、沖縄方言で「マチ」といえば、本土でいう「市」に類似するものを指し、その自然発生的な性格は、公設市場制を取り入れた後も持続してきた。それは「ナファヌマチ」の変容によって知ることができ、現在の開南や農連市場周辺に受け継がれている。この「マチ」は基本的に女の世界だったのである。

こうした「マチ」には、更に小規模のものがあり、これを規模の大きな「マチ」と区別して、「マチグァー」と称している。那覇にはいくつかの「マチグァー」が立ったが、それは、早朝あるいは夕方など時刻を定めて一〇名そこそこの売り手が集まるといったささやかなもので、多数の人々が蝟集する「マチ」とは、規模や組織化の程度において異なっていた。

一方、南島では商業的な拠点としての「店」の誕生も新しかった。沖縄方言では「商店」のことを「マチヤ」といったが、「マチヤ」の普及・定着は、主として近代の本土寄留商人の登場によって始まったといってよく、このために「ヤマトゥマチヤ」の名称が使用されたのである。そして、「マチヤ」を拠点とした沖縄県人の商業活動が活発になるのは、戦後のアメリカ治政においてであった。

これとは別に「小規模なマチヤ」を意味する「マチヤグァー」があり、それは宅地の石垣の一部を壊して簡単な小屋を作り、そこでなにがしかの商いをするものを指し、これも女の仕事であることが多かった。本稿は、これらの商業形態の展開過程を那覇と石垣四個について、具体的に跡づけようとするものである。

一　はじめに

本稿は沖縄諸島における「町」の形成過程を把握して、そこに表れる態様を人の移動に関わる側面から考察しようとするものである。

沖縄諸島において、王城のある首里や対外貿易港であった那覇が、今日的な意味における都市的な骨格を獲得したのは第二尚氏時代のことである。特に一五世紀中葉から一六世紀前半にかけての尚金福王～尚真王時代には、琉球列島全域にわたる首里王権の伸長と権力の中央集中を背景として、首里・那覇に都市的な設備・機構が次々と整備され、この地域の以後の空間配置の基礎が固まった。

この時期に形成された首里・那覇の空間配置、すなわち、王都である首里と港湾都市である那覇が、それぞれ固有の機能を分かち持つふたつの中心をなす配置（これに泊を含めて三極構造と考えることもできる。王府時代に、この地域を示す場合に「首里・那覇」あるいは「首里・那覇・泊」と表現した）は、両者を結合する海の道（長虹堤）・坂の道（首里大道）を介して眼鏡型の空間を形づくり、以後いくたびかの王府権力の消長にともなう部分的な変容あるいは改編がありながら、にも関わらず、近代に至るまで基本的構造に大きな変化を生じることなく継承・持続してきたと言える。

それはこの地域の自然地理的な条件（丘陵上の首里・浮島の那覇・河口の泊）に基礎づけられるものであるが、同時に、王府の権力形態を空間的な秩序として明示するものでもあった。図式的に言うならば、沖縄本島支配の中心としての首里、対外貿易・外交拠点である那覇、離島支配の根拠地である泊と、それぞれ王府権力の根幹を体現するものであった、と言うことになる。

このような全体の枠組みの下に、首里・那覇・泊はそれぞれ異なった機能を分かち持つ個別領域として存在したが、そのことは同時に、それぞれの領域における空間配置とそれを支える物質的な基礎構造においても、大きな変容を経ずに近代まで持続・保持してきたことを意味している。

そして、そこで営まれてきた日常生活の具体的な様相も、この空間的・物質的基礎に規定されて（王府の支配形態の特異性を反映しつつ）、日本本土の一般的な都市（あるいは町）の様相とは異なる側面を示しているのである。

これを端的に表現するものが商工業とその在り方である。この点を「町」に引きつけていえば、首里・那覇・泊の「町」は職人町や商人町を「町」の主要な空間的・物質的な要素として積極的に生み出すことがなく、それらをほとんど欠落したまま近代に至ったということである。

ここで検討してみたいことは、都市的な機能・空間的な基礎構造を早い時期に獲得し、それ以後も数百年にわたって、絶えることなく存在し続けた首里・那覇でありながら、ついに固有の商工街区を形成することのなかったこの地域が、近代に至ってどのようにそれを実現したのかということである。ここでは特に商業的空間に着目してみていくことにし

たい。

初めに、那覇・首里・泊の位置づけとその概要を示す。

二　那覇の空間構造

沖縄における都市の形成は、既述のように尚金福王～尚真王時代以来、那覇・首里を中心にしてめざましい進展を示した。

尚真王時代には、按司を首里に居住させて中央集権を確立する一方、南海貿易の拠点である那覇港を充実させて、周辺に各種の都市的な設備・装置を造営し、この時期に、王都としての首里、港湾都市としての那覇の機能をほぼ確立したといってよい。その具体的な様子は『球陽』その他を通じてある程度知ることができるが、こうして作り上げられた首里・那覇の都市構造は、それ以後、沖縄戦で首里・那覇が壊滅するまで継承してきたのである。

この段階での那覇は、通称して「浮島」と呼ばれ、安里川と久茂地川の河口に広がるカタバル（潟原・潮入り地）に囲まれた島であった。このために尚金福王代には長虹堤を築いて潮入り地に道を拓き、崇元寺（国廟）を経て安里から首里大道に接続し、那覇と首里を結合したのである。

ところで、那覇は「那覇四マチ」と呼ばれるように、行政的には、那覇港を中心にして左右に展開する東町・西町と、島の西北に位置する若狭町および久茂地川の対岸の飛地である泉崎町からなっていた（王府時代は東村・西村・若狭町村・泉崎村と記された）。しかし、行政的に「那覇四マチ」とは区別されてきた久米村も、空間的・機能的には那覇のうちに含まれている。

久米村は、中国・福建からの移住民、久米三十六姓（唐栄ともいう）の居住地とされ、松尾山・内兼久山を背後にして、前方に久茂地川を望む浮島の中心に設けられていた。

東村と久米村の境には広場があり、その周辺に天使館（冊封使の宿泊所）・両天妃宮（媽祖宮）・親見世など各種の施設が相次いで設置されたが、これらの施設はいずれも海外通商や海上交通に関わるもので、この地域が通商外交のための公的な空間であったことを示している。薩摩入り以後は、さらに砂糖座が天使館の並びに設けられ、港のある渡地に面して仮屋（薩摩在番奉行所）が置かれていた。

この広場の背後に久米村が設置されていたが、久米村の居住者（久米士族）は外交官僚としての性格を持ち、中国語に通じて、中国的な教養・文化を身につけた者たちが多く、彼らをとおして中国文化の諸要素が流入したのである。

一方、東村・西村の居住者は那覇士族として久米士族とは支配を異にし、比較的下級に位置づけられていたもののようである。

波之上宮から久米村を貫通する久米大道の南端には「クニンダウフジョウ（久米大門）」が設けられていたが、ここから前述の広場にかけて、すなわち、機能を異にする久米村と西村・東村との境界の空間が、沖縄戦で那覇が壊滅するまで、公的空間の核であるとみなされてきた。

久米村の背後の松尾山の裏側、すなわち島の西北岸には、主として民

間人・職人などが居住する若狭町があった。伊波普猷によれば、当初の若狭には相当数の外来者が居留していたというが[1]、以来、那覇の商工平民の居住区と位置づけられてきたようで、羽地朝秀によって作られた遊廓・辻町（辻村）とともに、表の公的な空間である東村・西村に対して、裏の日常的な空間としての役割を受け持ってきたとされる。しかし、若狭町村の具体的な歴史は必ずしも明らかではなく、今後の研究を必要とする。

以上のような対外貿易拠点としての那覇に対して、宮古・八重山など域内の流通に使用した泊港が那覇の北方に設けられて、ふたつの港は公的に使い分けられてきた。この泊から首里に至る道は、崇元寺（国廟）近くで那覇道と出会って（泊街道は、当初は国廟の門前を通っていたが、後にその裏を迂回するように改められた）、安里を経て首里の坂を登ったが、那覇の北端のイベガマからは、カタバル（潟原）を横切る泊往還道が作られ、泊高橋を渡るとその先は本島北部につながっていた。これを逆に辿って、イベガマから那覇の町なかに入る道筋は、松尾山を久茂地川にそって南に迂回して久米大門に出る久茂地大通と、若狭町にそって北側から西武門に至る若狭大通があった。すなわち、表道としての久茂地大道に対して、裏道としての若狭大通が対比されていたのである。

以上のような空間構造は、薩摩入り以後も大きく変容することなく継承された。というよりも、以後に生じる社会・経済的な諸条件がもたらす物質的・空間的環境の整備は、むしろ過去を継承する空間構造を補強・持続する方向に作用してきたように見受けられる。

薩摩支配以後、南海・中国貿易の総体的な衰弱にともなって、王府は域内生産に依存する近世的な国家経営をめざして諸制度を改革、新たな体制を整えていくが、その際の都市に繋がる政策として、首里・那覇・泊・久米に農民が移入することを禁じ、その職工民化を阻止すること、公用職人の徴用を那覇・首里・泊に限り、その一方で、町住みの者（町百姓）に対して丁銀を免除し、職人の税銭を免じ、あるいは報償によって商工の育成を促すこと、などが行われた。また同時に、困窮した無禄士族の職人化を公に認めて奨励・推進したのである[2]。

このような一連の処置は、首里・那覇・泊・久米に近世的な町の性格を与えて、農村との役割区分を明確に保持しようとするものであったが、その一方で、那覇の商工の担い手に士族身分を持つものが増加し、士族・町人（町百姓）の階層的な識別が次第にあいまいになっていく結果をもたらした。このことも一つの要因となって、本土の近世都市にみられるような固有の町人階層を生み出すことがなかったのである。

こうして那覇は、王府の直接経営による対薩摩・対中国交易の港湾・外交都市の骨格を受け継ぎながら、同時に周辺の農漁村の食糧消費地として、あるいは商工業製品を供給する物産流通の基地としての性格を併せ持つことになり、首里往還・泊往還は、公的な街道の性格に併せて、日常的な生活道の機能をより強く持つものとなっていく。このような那覇の機能の拡大を反映して、若狭町村は分村を潟原方面に拡大していって「ミンダカリ（新村梁）」を拓き、イベガマに「マチ（後述）」が立つようになり、一方、久米村も、久茂地川沿いの荒地を開発して久茂地・

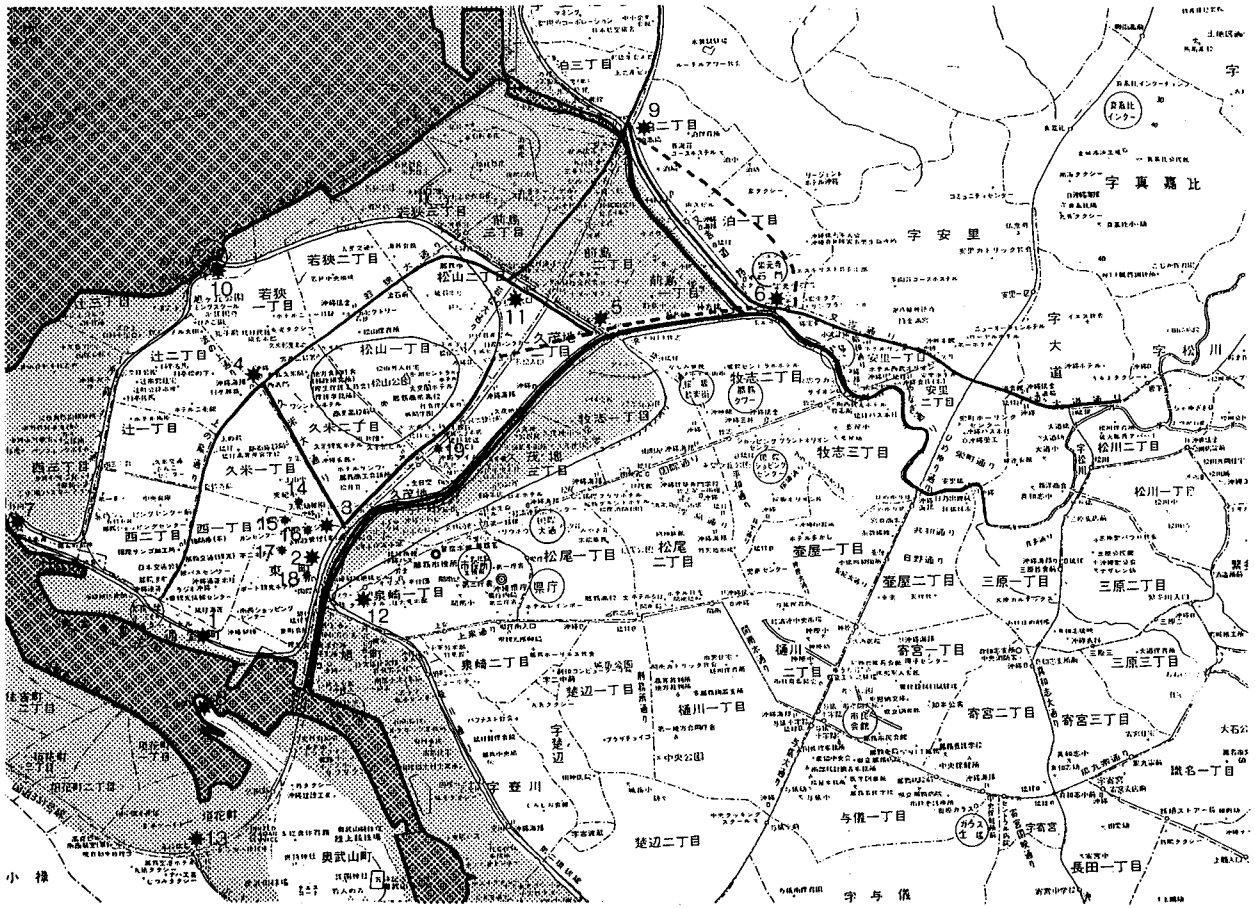

図1　旧那覇市街の復元地図

1．通堂（那覇港）
2．天使館
3．久米大門
4．西武門
5．美栄橋
6．崇元寺
7．三重城
8．奥武山
9．泊高橋
10．波の上宮
11．カタバルマチグァー（潟原町小）
12．泉崎
13．カチヌファナマチグァー（垣花町小）
14．上天妃宮
15．下天妃宮
16．仲毛
17．フルジマチ
18．ナファヌマチ（東町市場）

▒は現在の海面・湖面・川

▒は旧潮入地

……は首里往還道

━━は若狭大道・久米大道・久茂地大道

深地の分村をつくっていった。[3] 那覇の市街地は、潮入地・荒地を開拓しながら東に拡大していったのである。このように市街地が東に拡大していく傾向は、近代以後も継続・進行して、最後は崇元寺側からも潟原の埋立てが行われた。これが現在の前島地区であるが、その結果、泊と陸続きになって、那覇はもはや島ではなくなったのである。

戦後はさらに久茂地川の対岸の市街化が進行して（これには米軍の軍政が関わる）、真和志村に連続して今日の那覇の形態が完成した。

以上のスケッチは、長い時間をかけて那覇の市街地は東に拡大していったが、にも関わらず、旧那覇地域の基本的構造には大きな変化が生じなかったこと、そこで営まれた日常生活もほぼ同じ構造の下で継承されていたことを示すといえる。そして、この那覇がもっとも大きな変貌を示すのは明治時代後期以後のことで、なかでも決定的な変化は沖縄戦と戦後復興にあった。

以上に略述した那覇の空間的な変容は、この都市の商工の様相と内的に関連するものでもある。

三　首里・那覇の「マチ」

首里・那覇の商業の特徴のひとつに、長らく露天商いが中心になっていたことがあげられる。以下にこの点を見ていくことにする。

那覇の商業は、自然発生的な露天市から始まったものとされ、その様子は、冊封使節の残した記録などから断片的に知ることができる。そして、そこから推測される状況は、以後もそう変わることなく受け継がれて、近代に至ったのである。

この商業形態を端的に示す表現として、「マチ（町）」あるいは「マチグァー（町小）」が用いられてきた（地図等の表記には「市場」の文字をあてている）。この場合の「マチ」・「マチグァー」とは、人の寄り集まる特定の空間を示し、「グァー」はその規模が小さいことを表す。

「マチ」・「マチグァー」は、「マチヤ（町屋）」・「マチヤグァー（町屋小、あるいはマチャグァー）」と区別して使用してきたもので、沖縄在来の商業的な空間を示す語として意識的に使われてきたと考えられる。以下では『球陽』『由来記』などの古記録類と『那覇市史・史料編二・中・七　民俗編』[4]に採録されている民俗調査報告などに依拠しながら、その概略を述べることにしたい。

沖縄在来の商業的な空間としての「マチ」は、『李朝実録』に収録されている朝鮮人の漂流記や、蕭崇業『使琉球記』など冊封使節の残した記録から、少なくとも一五世紀には那覇・首里に発生し、その後も継承されていたことが分かる。また、薩摩入り以後についても、東村の天使館の周辺に空地があって、ここに「毎日午後に女たちが笥を携えて集まり、商品を地面に並べて」商っている様子を描写した記録があり、これをそのまま受け継ぐ「マチ」は大正時代まで継承していた。

この「マチ」・「マチグァー」は、空地・辻・道端などに、人の寄り集まる場が自然発生的に生まれ、それが商業的な空間となったものを指している。その原型は本土の「市」の原初的な形態に類似すると思われる

が、「マチ」・「マチグァー」は基本的には毎日開かれており、市日を限定したものではなかった(例外については後述する)。そして、この空間を個別的に命名して「〇〇マチ」と称したのは、この人の集まる場が特定的・恒常的・固定的であると考えたからであろう。

古く那覇の天使館の付近で観察された「マチ」は、以後「ナファヌマチ(那覇のマチ)」と称するものに発達して、明治・大正時代には、東町の北側から久米大門の前道に蝟集する露天市に受け継がれていた。一八七七年(明治一〇)発行の伊地知貞馨著『沖縄志』に付属の市街地図には[5]、天使館前の広場の南端に「市場」の書き込みがあり、公的な施設に取り囲まれたこの広場が、同時に「マチ」の中心でもあったことを示している[6]。この「市場」がすなわち「ナファヌマチ」であるが、一九一八年(大正七)には公設化されて、地域を限定した「東町市場」として整備された。新しく整理された「東町市場」では、市場のなかが製品ごとにある程度区画されていたようで、その様子は『那覇市史・史料編二・中・七 民俗編』に記載の市場の地図からうかがうことができる。それらは「イシゲーマチ(据笥市)」「グマムンマチ(小間物市)」「ヌイムンマチ(塗物市)」「チブヤマチ(壷屋市)」「クミマチ(米市)」「ンムマチ(芋市)」「トゥブシマチ(松明市)」などで構成されていたといい、大半は大きな「マチカサ(町傘)」をたてて、その下に置いた木台や篭などに商品を陳べて商うもので、古い写真に残されている。もっとも、王府時代には民間の傘の使用は規制されていたから、当時はまったくの野天市であったはずであるが、絵画資料等をみると、かならずしもそうではなかったようである。一九三五年(昭和一〇)ごろからは、この「マチカサ」に変わって「トゥータンヤー」(トタン葺きの小屋)」が登場して、徐々にこれに変化していったという。

しかし、「東町市場」となってからも、「ナファヌマチ」の実質はそれほど変化することなく持続して、沖縄戦による壊滅まで、いや戦後の新しい商業空間にも継承されてきた。

すなわち、「ナファヌマチ」が作りあげた仕組みは、現在のコンクリート造りの「公設市場」に受け継がれているのである。例えばこのことは、「公設市場」が恒久的な建物となり、その周辺に商店ができても、「『マチ』は通いの仕事場で、住む場ではない」とする職住分離の原則が、古い時代から現代の「公設市場」とその周辺まで、一貫して継承されていることに表れている。

また、「ナファヌマチ」は年寄りから年少者まで、女ばかりが参加する世界で、男たちが従事する業種は「シシマチ(肉屋)」などごく一部分に限られていた。この点も「マチ」の顕著な特徴なのである。

「マチ」を担った中心的な女たちは、士族出身者であったという。「イユマチ(魚市)」では特に泉崎士族出身が多く、それぞれ世襲的な権利を持っており、「イユウイガシラ(魚売頭)」などの役が決まっていた。たとえば、魚介類は「ハンシー(年長の女)」が言い値で糸満の魚売り女から買い付けて、これを仲間の「アッチネーサー(販女)」に売らせていた。こうして、糸満の女たちは、その周辺で売れ残りの小魚を商うことしかできない仕組みになっていたらしいのである。

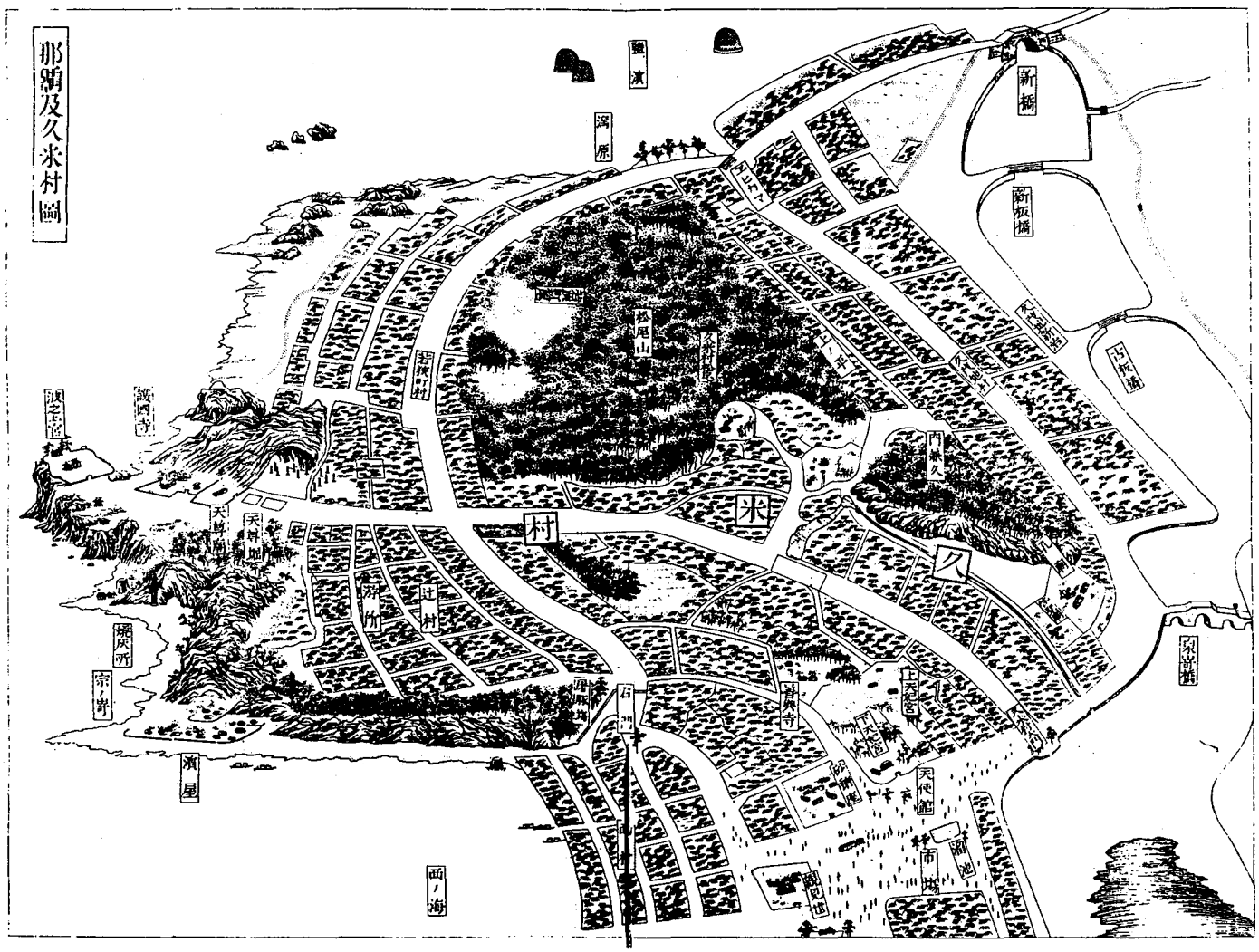

図2　伊地知貞馨『沖縄志』1877に所収の「那覇及久米図」
砂糖座・親見世・天使館に南に「市場」の位置が書き込まれている。

以上のように、もっとも発達した段階の沖縄の「マチ」は、「アッチョードー（仲買女）」と「アッチネーサー（販女）」による組織立った仕組みを持っており、その主役は士族出身の女たちが受け持っていた。こうした女たちの作る組織は今日も様々の商業分野に見られ、いずれも類似した仕組みを作っている。「東町市場」は沖縄戦によって破壊されて、戦後の「マチ」はガーブ川沿いの平和通・牧志公設市場・開南の農連市場などに場所を移動したが、こうした変化にも関わらず「ナファヌマチ」の内実は今日も受け継がれているのである。

このような「マチ」の様子は、一八九六年（明治二九）六月刊の『風俗画報』臨時増刊の「沖縄風俗図」に次のように紹介されている。

布帛諸品を売買するは皆女子なり　然れとも古来女子は算法を知らず　縄を結ひて符となし　数万貫の銭といえども皆其法によりて算了したりが（略）　国中の互市には女子のみ群集して有無を通す　男子あづからず故に諸物を負担して至るものなし　皆頭に草圏をしき　其上に諸物を戴きて来る（略）　士の妻も共に出でて交易す　手に尺許の布を持つものは士の妻なりといへり。

婦女は街衢に相集りて　日用の物品及び鶏豚魚介を販売し　或は端布漆器を負戴して行商し　微毫の利を得て（略）

以上のような「マチ」に加えて「マチグァー」があり（後述）、さらに水売り（男）・薪売り（男）・魚売りの「カミアチネー（行商女）」や、季節的に中部から来る「ムムゥイグァー（桃売娘）」などの行商を加えて、那覇の日常の交易が成り立っていた。

ところで、明治時代には、前述の「ナファヌマチ」のほかに「フルジマチ（古着市・あるいはヌヌマチ（布市））」があり、天気さえよければ毎日午後に市が立って、たいへんな賑わいであったという。

東町には「イユグムイ（魚小堀）」という小堀があった。後にこの小堀は埋め立てられて、明治末期にはわずかに「カークシチ（井戸甑・井戸枠の意）」があったのみであるというが、ここに「フルジマチ」が立ったのである。この「イユグムイ」は『琉球国由来記』『琉球国旧記』などにすでに見えて、『那覇由来記』によれば、東町に火事が度々発生したので、「モノシリ（占師）」が「それは天妃宮の灯明の火性による」、あるいは「道の街火が火の字に似ているから」として、これに備えて小堀を掘ったとあり、『琉球国由来記』では判事をおこなったのは「地理人（風水師を指す）」[7]となっている。この点は照屋正賢「首里王府の風水受容について」に詳しい分析があるが、いずれにしても、このような古い謂われを持つ小さな堀が目印となって、その周辺に「マチ」が拡大していったのである。

琉球処分以後は、没落した士族婦女の処分した古着が大量に出回るなどして「フルジマチ」は繁栄し、やがて、これを基礎に沖縄全域の古着・衣料品流通の中心になっていった。そして、この流通を取り仕切ったのも士族出身の女たちであったという。

こうして、この地域は那覇第一の商業的地域としてその後も繁栄するが、これには古着商いにともなう「アッチョードー（仲買女）」の「マチヤ（町屋・倉庫を兼ねる。後述）」が発生して、この地域に集まったことも関係していると思われる。

当初の「フルジマチヤ（古着町屋）」は、単に住宅の一間を倉庫として利用し、在庫の古着を保管して置くといったもののようであるが、こうした家屋の利用方法が、後述の「ヤマトゥマチヤ（大和町屋）」に受け継がれていったのである。

このような那覇の様相に対して、首里にも「シュリヌマチ（首里のマチ）」があり、両者は対比されうるものであった。首里の有力士族は、直接に自分の支配地の農民から農産物を得ていたから、この「マチ」を利用したのは下級士族や平民だったのであろう。

「シュリヌマチ」は、首里・龍潭池の西側、現在の城西小学校のあたりにあった。『球陽』の一七一五年（尚敬王三）に「首里市地の南に、小店を創設し、並びに市の南地を広闊す[8]」とあって、ここで「小店」とは、小さな屋台のようなものを指していると思われる。この時に「小店」の営業を許可し、同時に「マチ」となる空地を南に拡大したというのである。前述のように、王府は、この時期に首里・那覇の「町」化を積極的に促進しており、この件もそうした政策の一環と推測されるから、同様の処置は「ナファヌマチ」に対しても採られたことであろう。

この「マチ」の売り手は、周辺の農村からやってきた人々（たぶんは女たち）で、ここでも商工民の集住化ないしは職住一致を促すような政策は認められず、その後の「マチ」に引き継がれる職住分離の原型が伺えるのである。

一七二八年（尚敬王一六）には「始めて人宅の、家を以て垣と為し、並びに店を開くことを許す。往旧の時より、本国の人宅、或いは石を築きて垣と為し、或いは竹を栽培して囲と為す。而して家を以て垣と為し、並びに店を開き貿易をするを許さず。是の年に至り、始めて開店並びに家垣を免す[9]」とされ、はじめて家屋を「店」とすることを認めたという。

この「店」の形式は、後の「マチヤグァー」に継承されるものであるが、それが王府時代の首里・那覇にどの程度普及していたのかは明らかでない。しかし、明治時代の在り方から推測すると、それほどたくさん存在したとは思われず、「マチヤ」・「マチヤグァー」は、基本的には近代以後に急速に広まったものと考えられる。その具体的な様相は後述する。

一七四二年（尚敬王三〇）には、「シュリヌマチ」に対して「始めて、柵欄を首里市六衢の口に設く。前に市法を定め、人集まりて晩に至るを禁止す。然れども多方の男女聚集して、以て之れを制止難し。是を以て、命じて柵欄門六口を市の左右前後に設けて、以て小民生弊の端を杜ぐ」という処置をとる。それまでは「マチ」の広場に人々が蝟集して夜まで賑わっていたが、この処置によって「マチ」に時間的な制限が加えられることになったらしいのである。

しかし、明治時代以後の「シュリヌマチ（町端マチ。元の位置から綾門大道側に移動していた）」の様子をみると、ここは「ユサンディマチ（宵町）」であるとされており、夕方から活況を呈するものであったというか

ら、この規制が以後も継続的に実行されたわけではなかったかもしれない。また、「町端マチ」の中心地域には、小屋掛けの店が並んでおり、それはしゃがんでようやく入れる程の軒の低いものであったという。「小屋」といってもこの程度のものを指し、本土の商店のようなものではなかったのである。

ここで考慮しておきたい点に、なぜこのような「マチ」の商業が根強く継承されてきたのかということがある。これには貨幣経済の問題その他多方面からの解釈がありうると思われるが、ここではひとつだけ、王府の対外政策が関わっており、これによって補強された「マチ」観念が、その後も強く伝承してきたと思われる点を見ておきたい。

すでに東恩納寛惇も触れているごとく、「ナファヌマチ」は冊封使節の渡来に際して、場所を移動していた。

このことは汪楫の『使琉球雑録』（一六八三年・康熙二二・尚貞王一五）において、下天妃宮の前、天使館の東に数十畝の空地があり、ここに市が立っていたが、今は「馬市街（「マチグァー」の漢字表記とする説が有力）」に移っている、とされていること、これを受け継いで徐葆の『中山伝信録』（一七二一年・尚敬王九）で「現在、市場は辻の海ぞいの堤防の上にある。朝と夕の二回市がたつ」と記述されていることと関わる。要するに「ナファヌマチ」は、冊封使節がやって来るたびに西海に面した「辻原」に移動する決まりになっていたのである。したがって、周煌の『琉球国志略』（一七五七年・尚穆六王）においても、市は辻原に立っており、天使館の前にあった数件の店舗もみな移動していた、というのである。

すなわち、「ナファヌマチ」は、本来は外交目的で設けられた空間を、未使用時に仮に利用していたに過ぎないもので、したがって、この空間が本来の目的に利用される際には、撤去・移動させられたのである。このことを言い換えれば、「マチ」が立つ空地（未使用地）には「当面の未使用地」も含まれており、「未使用」の状態の時だけ仮に「マチ」となるが、これに対しての公的な干渉はない、ということなのである。後述の「カチヌファナマチグァー」が私有地に立ち、後に私設市場となったらしいことも、こうした「未使用地」に対する理解が、近代に至って変容した結果ではなかろうかと思われる。また、「シュリヌマチ」に対する前掲の一七四二年の処置も、これは「マチ」を公権力が管理・運営するというものではなく、単に夜間は本来の「空地」に戻したというだけのことかもしれない。

こうして「マチ」は「仮の場」に立つとする通念が、為政者のみならず、民間においても以後長く継承してきたと考えられる。逆にいえば、「仮の場」があれば、誰もがそこに「マチ」を立てることができる、と考えてきたのである。

このことは、同時に王府の「マチヤ」政策にも関わっていると思われる。

前述のごとく、王府は一七二八年（尚敬王一六）に「始めて人宅の、家を以て垣と為し、並びに店を開くことを許」したのだから、それから二五年ほど後の『琉球国志略』の時代に、天使館の前にいくつかの固定

的な店舗があっても不思議ではないが、これも冊封使節の在琉期間には移動した。たとえ店舗が許可されたとしても、本来の意味での商業空間として固定されたものではなかったのである。実際、「親見世日記」には、士族屋敷を「マチヤ」に改造する「願書」が散見されるというが、そこには次のような表現も含まれている。

私屋敷之儀、東表囲ちねぶ（註、網代垣の事　原注）長三間取除、店構仕度奉存候　為晴立所にては無御座候

この要旨は、「目立たないところですから、許可して下さい」ということで、本来、「マチ」や「マチヤ」は可視的であってはならなかったのである。

四　那覇・首里の「マチグァー」

これまでに「ナファヌマチ」「シュリヌマチ」を紹介してきたが、那覇や首里には、長い歴史をもちそれなりに組織化されたこれらの「マチ」以外に、自然発生的に生まれたごく小規模の「マチ」がいくつか散在していた。これを「マチ」と区別して、通常は「マチグァー（町小）」と称する。その相違は基本的には規模にあったが、小屋の有無も関わっていたかもしれない。

那覇の町なかでは、久茂地と崇元寺の前に「マチグァー」があった。

久茂地の「マチグァー」は「クモジマチグァー」といって、久茂地大通のほぼ中央の、広場のようになった辻に立った。ここに売り子たちが集まって、周辺に住む人々の日々の食料を商っており、人々はその日一日の必要分だけを購入するのである。

『那覇市史・民俗編』の記述によれば、男は「カタミニー（肩荷担ぎ）」、女は「カミニー（頭上運搬）」で集まってきて、野菜・カントーフ（焼豆腐）・魚介類・肉・味噌・米・油などを商っていたという。肉は小禄から来る男たちが、魚介類は糸満から来る女たちが扱った。

また、崇元寺の門前ではすべての人が車馬から降りて敬意を表する習慣があり、ここに「ソウゲンジマチグァー」が立ったという。こちらは久茂地よりもさらに規模が小さく、夕方に集まる「ユサンディマチ」であったともいう。魚介類・野菜・豆腐・もやし・砂糖黍などを売っていたが、盆の前に砂糖黍売りが賑わう程度で（盆に仏壇に供する）、通常は一四、五人がばらばら出ている程度のごく閑散としたものであったという。魚売りは泊から、野菜は近辺の農家から、豆腐売りは安里あたりからやってきたという。

このほかに、那覇の市街地の南北の境にもそれぞれ「マチグァー」が立った。北境のものは、潟原側の「イベガマ」に立つ「カタバルマチグァー（ミンダカリマチグァーともいった）」であった。

「カタバルマチグァー」は、一八八五年（明治一八）制作の『沖縄県管内全図』[10]に「ナファヌマチ」・「トウマイマチグァー（泊町小）」とともに「市場」と記入されているから、「クモジマチグァー」「ソウゲンジマチ

グァー」よりも規模が大きく、よく知られていたようである。「イベガマ」は、潟原を渡って泊・首里方面へ行き来する拠点であったから、通行人も多く、周辺の農村との結節点となっていた。ここに朝夕二度の「マチグァー」が立ち、野菜・芋・豆腐などの食糧の他に、農家向けに小豚・鶏なども売られており、このために「ワァーグァーマチ（小豚市）」ともいった。そして、先に触れた「クモジマチグァー」「ソウゲンジマチグァー」が、もっぱら町住みの人々を対象にしていたのに対して、近くに農鍛冶屋・線香屋が軒を連ねるなどして、農村の必要をも満たしていた。[11]

この道の対岸の泊高橋には「トゥマイマチグァー」があり、ここにも朝夕二回の「マチグァー」が立ったという。

朝は、近くの農家から農産物などが持ち込まれるが、夕方は、近所の女たちが豆腐や魚などを商っていたという。泊高橋は中部の浦添などとの接点であったから、物資の集散地としてなかなか賑わっていたといわれる。

一方の那覇の南端は、垣花が那覇と南部の糸満などを結ぶ拠点で、ここにも同様に「カチヌファナマチグァー」が立っていた。

これらのうち「カタバルマチグァー」と「トゥマイマチグァー」は後に公設市場となったが、「カチヌファナマチグァー」は私営として残ったらしい。

また、首里においても平良、汀志良次、赤田などに同様の「マチグァー」が早くからあったという。

以上のような那覇・首里の「マチグァー」の様相は、南島の「マチ」の原型をよく示していると思われる。あえて言えば、町角に「三人よればマチグァー」ということすらできるのである。

そして、前述の「ナファヌマチ」は、士族出身の「アチョードー（仲買女）」が、農漁村の女たちが運んでくる商品を買い付けて、「アッチネーサー（販女）」に分配・販売させる形式をとっていた（したがって、各種の権利関係などがあった）のに対して、ここでいう「マチグァー」の場合、一日分の商品を「カタミニー」・「カミニー」で運んで来て、その日に売り尽くして帰るものであるから、ある程度決まった場が存在し、そこに売り手と買い手が集まってきて、自然発生的な商業的空間を生み出していたのである。

さらにいえば、このような「マチグァー」は、村の外れの大きなアコウやガジュマルの木など目印があるところに「アチョードー（買出し人）」が出かけていって、村の女たちから農産品を買い入れ、あるいは逆に、何らかの商品を販売するといった交易形態につながると思われる。こうした町と村を結ぶ特定の場での交易が、もっとも原初的な「マチグァー」であった。分かれ道・境界・空地・池端・坂などの、なんらかの特徴・目印を持つ場所で、人と人が出会って交易を行えば、そこがすなわち「マチグァー」というわけである。今日も、道路端で日傘を差してアイスクリンを売っている娘たちを見かけるが、これも、もっとも小さな「マチグァー」のひとつなのである。

王府時代の末期、あるいは明治時代の初期には、首里・那覇以外にも「マチグァー」ないしは小規模の「マチ」が各地に発生していたようで

ある。それは、糸満の古地図に「市場」と記入されている例があるなどから分かり、[12]それらが今日の「公設市場」に発達したのである。

五　那覇のマチヤ

これまでに、沖縄の「マチ」は本土の「町」とはやや異なり、むしろ「市」に類似するものであったことを示してきた。そして、この「マチ」は、今日も「公設市場」を中心に継承されているが、現在では「マチ」に並んで「商店」あるいは「商店街」も存在し、両者は補完しあって複合的な商業空間を作っている（ただし、近年は大規模なスーパーマーケットが増加して、大きな変動が生じつつある）。以下では「商店」や「商店街」の形成について概略をみていくことにしたい。

沖縄方言には、既述の「マチ」とは別に、「マチヤ（町屋）」がある。これは家屋に結びついた商いの場、要するに「商店」のことを指しているが、なかでも規模の小さなものは、特に「マチヤグァー（町屋小）」と称している。

『球陽』の一七二八年（尚敬王一六）には「是の年に至り、始め開店並びに家垣を免す」と出てくるが、それは、宅地の周囲を取り囲む石垣の一部を取り払うことを許可し、石垣に沿って離れ小屋をこしらえて（これが「家を以て垣と為す」である）道側を開放して店とし、なんらかの商いをおこなうことを許可したものである。

これに類似する小店は、在来の石垣囲いの士族住宅が比較的よく保存されている石垣・四個において、現在もみることができる。

多くの場合、石垣の片側の角（向かって左が多い。炊事屋の手前となる）を崩して南面する道路に接して小屋を作る。これを貸店にしたり、家の者が小規模な商いをおこなったりするのである。

那覇や首里のように新しい様式の住宅に替わったところでも、この形式を受け継いでいると思われる雑貨屋が少なからず見受けられる。この場合は二階造りの一階を店にあてて、家の女が商いに従事し、男は別の仕事を持っていることが多い。

そして、これらに共通する特徴は、軒を並べて商店街を形成するのではなく、住宅地のなかや道端にぽつぽつと散在していることである。すなわち、住宅の一部を小店にしたのであって、改めて商業的な家屋として造ったものではない。したがって、方言で「マチヤグァー」という場合、一般には、住宅の片隅を利用した小店、とりわけ雑貨屋（食料品・酒・煙草・雑貨などを扱う）のことを指す場合が多い。

「イッセンマチヤグァー（一銭町屋小）」といえば、子供相手の駄菓子屋のことで、多くは学校の周辺や通学路に面して営業している。また、これに類似したものとして「ジュウシイーヤー（雑炊屋）」や「スバヤー（沖縄ソバ屋）」などの食堂をあげることができ、「パーマ屋」もこれに含まれる（これらの食堂も主婦が経営していることが多い。「パーマ屋」も同様で、普通「愛子パーマ」「ゆかりパーマ」などと女性の個人名を冠する）。そして、こうした夥しい数の小店が散在することが、那覇周辺の景観的な特徴でもあるのである。

このように見ていくと、一七二八年に許可された「店」は、住宅の形式的な変化にも関わらず、今日も受け継がれているといえる。それは職住一致であり、にもかかわらず一家をあげての商業活動ではなく、ただ住居の一部を利用した女たちの商いである点に特色がある。これが「マチヤグァー」の基本的な性格なのである。

石垣を部分的に崩して作った「マチヤグァー」は、石垣・四個では、この地が都市的な性格を獲得していく過程で重要な役割を果たした。具体的な様子は後述するとして、ここでは「マチヤグァー」が寄留商工民の大きな拠り所になったことを指摘しておきたい。士族住宅の石垣の一部を崩して仮小屋を作り、寄留民に貸す方法が一般化して、それが日常的な商業活動の基礎となっていったのである。

那覇においても、「店売り」といえば、明治時代の半頃までこの形式が中心であったようである。そこにやがて、もう少し本格的な「マチヤ」が生まれてくるが、それは仲買人が自宅の一部屋を倉庫替わりに使用する、といった住居の倉庫化から始まったもののようである。それは石垣でいう「クヤー（小屋）」につながるものと考えられる。

『那覇市史・民俗編』の記述によれば、那覇には明治時代から大正初期まで、後述の「ヤマトゥマチヤ（大和町屋）」以外の「マチヤ」はいたって少なかったという。当初の形式は石垣囲いの住宅の、表に近い座敷（一番座か二番座）に商品を積み上げて、そこでジョウ（門）から入ってきた客の相手をするものであったが、やがて屋敷囲いの正面の石垣を全面的に取り払って、商家構えに作り替えるようになったという。この「マチヤ」は、主に泡盛・味噌・醤油などを扱う商店が多かったが、主に東町から普及していったから「ヒガシマチヤ（東町屋）」の呼称があったという。

これと同様に、鹿児島や大阪などからやってきた本土寄留商人の経営する商店は「ヤマトゥマチヤ」といった。これも、当初は石垣囲いの借家の一部屋を店に充当するものであったが、一九一三年（大正二）に東町の半分を焼き尽くす大火災があって、これを契機に道路に直接に接する大和風の商家構え（赤瓦の二階屋）を採るものが急増したという。こうして東町一帯には、「ヤマトゥマチヤ」を中心にして、本土と同じような商家が軒を連ねる商店街が形成されることになった。そして、この時期から「マチヤ」とは「ヤマトゥマチヤ」の形式を採るものを指すことになって、那覇の繁華街から石垣囲いの屋敷が消えていったのである。

『那覇市史・民俗編』の統計（年月不詳。明治時代末期？）は、総数三三五所帯の本土寄留商人をあげているが、実際にはこの他にも大勢存在したであろう。そのうちの六割強は鹿児島県の出身者であった。

これらの本土寄留商人については、すでにいくつかの研究があるから、[13] これ以上は触れないが、ここで強調しておきたいことは、本土との交易をほぼ独占した本土寄留商人の「ヤマトゥマチヤ」を中心にして、那覇の商店街が生み出されたことである。こうして商店街化した地域は、石門通・大門通・久茂地大通・見世の前通などであった。大正時代の後期には、大門前通などはすっかり本土風の商店街になり、大門前通・見世の前通に卸売業が集中していたという。こうして定着した那覇の繁華街

は、一九四四年（昭和一九）に空襲で焼失するまで変化することはなかったのである。

『那覇市史・民俗編』によれば、大門通には六四店舗が営業していたといい、出身別の内訳は次の通りであったという。

沖縄　出身　二五店舗
鹿児島出身　二三店舗
熊本　出身　一店舗
徳島　出身　四店舗
奈良　出身　二店舗
岐阜　出身　二店舗
兵庫　出身　二店舗
広島　出身　三店舗

ところで、細かな商店名などを記入した「昭和石版印刷所」作成の石版刷りの「商業案内図（昭和初期・年代不詳）」[14]が残っている。これは買物案内地図といったもので、なんらかの広告料を払った商店を書き込んだものらしいが、この地図から当時の「マチヤ」の状態をある程度推し計ることができる。

この地図によると、もっとも「マチヤ」の集中する地域は、久米大門前を横切る大門前通で、次に石門通・見世の前通となっている。そして、大門前通に連なるものとして、以下の商店を挙げることができる。

沖縄買物会館・マーケット・丸山分店・荒水書籍店・丸山号百貨店・古田電設協会・那覇新薬・広島屋本店・平尾本店・イケヤ洋品店・大正堂時計店・南洋薬品・坂元洋品店・松栄堂・三木金物店・成清商店・堀口内科・古田蚕種・平岡自転車店・照屋洋服店・美昌堂印房・那覇ラジオ・丸屋陶器店・東京堂洋服店・千田紙店・儀間商店・新文社

このなかで沖縄県人の経営と思われる店舗は、照屋洋服店と儀間商店のみである。

同様に石門通とその周辺をみると、ここにも次のような「ヤマトゥマチヤ」が軒を連ねている。

山形屋・昭和堂時計店・野村光世堂・みのる洋品店・平尾本店・旭龍・佐藤商店・佐藤製薪店・服部支店

また、見世の前通とその周辺は次のようになっている。

並川金物店・一与タクシー・勧業銀行・一四七銀行・仲村梁呉服店・池上自転車店・玉井商店・井上商店・中嶋商店・丸善興業（？）

これに混じって一部に沖縄県人経営の小店が含まれるが、「ヤマトゥマチヤ」が中心であることには変わらない。

また、西町にかけては大会社の支店・新聞社などがあり、東町市場の周辺は、県水産会を中心にして海産物商組合・カネキ海産物・マル玉海産物・テルヤ海産物・ヤマセ魚問屋・ヤマセ氷室・山口海産物などの海産物問屋が集まっており、ここに本土向けの移出業が集中していたことが分かる。

そこで、この地図に出てくる二〇〇軒近くの「マチヤ」のなかから、明らかに沖縄県人の経営と思われる商店を改めて拾い出してみると、僅かに三五軒程度しか挙げることが出来ない。沖縄県人経営の店舗の多くは、規模が小さく記載する必要がなかったのかもしれないが、いずれにしても全体の二割にも達せず、しかも、公営や尚泰商会などをのぞくと、雑貨屋・醤油店・履物店・看板店・茶舗・洋服店・呉服店・蒲鉾店・仕立屋・指物屋・泡盛店・肥料店などに限られ、その立地も分散的である。

以上のように、那覇の商店街は「ヤマトゥマチヤ」を中心にして成立し、それがこの地図の描かれる昭和時代まで継続していたことが分かる。そして、本土寄留商人たちは、山形屋のような百貨店や各種の専門店を作って、主として本土から移入する近代的な商品（時計・洋服・洋品・書籍・靴・陶磁器など）を扱っていたことも分かる。このことは在来の商業拠点である「マチ」と「ヤマトゥマチヤ」のつくる「商店街」とは、取り扱う商品において、したがって、生活との関わりにおいて、まったく異なっていたことを示すのである。

以上のように、近代的都市に不可欠の「商店街」が那覇に成立したのは、移入商品を扱う「ヤマトゥマチヤ」の集合によってであったことが明らかになった。すなわち、那覇には、「マチグァー」から「マチ」を経て「公設市場」に到る流れがひとつあって、その商品構成は、王府時代以来基本的に変わらない日常生活の必需品であったが、もうひとつの流れは「マチヤ」「ヤマトゥマチヤ」に発する「商店街」で、それは近代的な移入商品の受容を促進するものであった、という二重構造があったことになる。この二重性は今日まで受け継がれており、象徴的には「牧志市場」およびその周辺と、国際通の「商店街」に分かれて存在しているのである。

すなわち、那覇は、近代に至って寄留商人を中心にした「商店街」を新たに生み出し、この新しい商業空間を通して島外の商品文化に結びついていったということができるのである。

このような那覇の変貌とともに、王府時代から少しずつ「町」的な機能を獲得しつつあった名護・与那原・嘉手納・糸満なども、地域的な商工業の拠点となっていき、また、先島の行政中心地である石垣・四個、宮古・平良についても、同様の発展をみることができる。(15)

そこで、以下では石垣・四個に焦点を合わせて、ここに見られる「町」の形成の具体像を追っていくことにしたい。那覇と同様に、石垣でも寄留商工業者が大きな役割を果たしたのであるが、ここには那覇とは少し異なった点が含まれている。

結論的にいえば、石垣においては、本土寄留商人に加えて、沖縄本島からの寄留民、宮古諸島からの寄留民、さらには周辺離島からの寄留民が、それぞれ特定の時期に一定の役割を果たしてきたのである。この点

に着目しながら、以下では、石垣の商工発展過程の概略を示すことにしたい。

六　石垣・四個の移住民と商工の展開

八重山の中心である石垣市は、明和の大津波の後にバンナ岳の山麓に復興され、後に再び海岸段丘の斜面を下って浜際に生まれた旧四個（登野城・石垣・大川・新川の旧四間切）を基に成り立っている。四個は、海岸と荒川川に挟まれた蒲鉾型の段丘の南面に位置し、段丘の北面には、学校・電力会社などの大規模な公共施設が配置されている。その先は荒川川によって農地と区分されているが、この北面は以前は松林などの未使用地であったという。旧四個の東西は、東側は平得にかけて、西側は新川川の荒引橋を越えて新しい市街地が広がり、一方、海側には港に隣接する地域が漸次埋立てられ、美崎町・浜崎町・新栄町などが生まれて、行政施設地区・飲食店街・旅館街・水産関係地区として新しい市街中心地を形成している。

以上の状況が示す在来の石垣・四個の空間的な特徴は、海岸線に沿ってほぼ東西（石垣では、実方位ではなく、海を南、山を北、左右を東西と表すことが多い）に横長の楕円状の市街地を作っていたことである。そして、その地割は、登野城・石垣・大川・新川の各区域を区切る海岸から山手へ向かって登る何本かの坂道（旧間切境）と、これにほぼ直行して、段丘をほぼ等高に東西に横切る道とからできている。こうして、各屋敷は海を望む側に「ジョウ（門）」を作り（東西を結ぶ道に面する）、この向きを表にして建物が建てられている。

このような直行する経緯の道路による井然たる地割は、先島の村落・市街地の特徴のひとつであるが、さらに細かく言えば、これらの道路や屋敷の方位に微妙なずれが含まれる場合があり、この点は別に検討することにしたい。

ところで前述のように、本来の四個は蒲鉾型の丘陵の南面を市街地としているが、その背後の尾根筋には露岩地域が横たわり、この露岩に沿って、市街地の北進を遮るように帯状の墓地域が東西に延々と続いている。この帯状の墓地域は現在も大方は残っているが、登野城については、都市計画事業にともなってバンナ岳山麓に開発した新しい墓地域に移動している。

旧来の四個の墓地域は、この丘陵上に帯状に連なるもののほかに、荒川川を渡ったバンナ岳の裾野にもう一列作られており、荒川川を挟んで都合二列になっていた。このふたつの性格的相違ははっきりとは分からないが、バンナ岳の裾野の墓地が高級士族のもので、尾根筋の露岩地帯の墓地は一般のものであったと言われている。

このような旧来のものに加えて、現在、バンナ岳のもう少し上の緩斜面に新しく二段の墓地域が作られている。新しい墓地域のうちの最上段は、前述した都市計画事業にともなって市が造営したものが中心であるが、民有地の借地も一部含まれており、その部分に郷友会墓地がある。郷友会墓地については別に改めて紹介する。

いずれにしても、四個の市街地は、海岸線と墓地域に挟まれて南北が限定されており、その結果、成立当初の空間的な配置を比較的によく保存してきたのである。

四個は八重山蔵元に属する諸役人や四間切の間切役人の居住地区として設けられたところである。『沖縄県統計書』[16]一八九一年（明治二四）をみると、この時点で大浜（登野城・大川を合わせる）の居住者がほぼ六〇〇〇人、石垣（石垣・新川を合わせる）が五〇〇〇人、合計一万一〇〇〇人程度であったが、このうちの五〇〇〇人弱は士族であった。この当時の首里や那覇の状態（首里では士族がほぼ六割、那覇では七割。ただし、那覇士族は町人化が進行していた）に比べると、その比率は決して高いものではないが、それでも四個が士族のための集落であったことは明白である。

こうした士族の住宅（士族屋敷）は、周囲を石垣で囲んで、正面（南向き。東西をつなぐ道に面する）には「ヒンプン（屏壁）」を建て、さらに道路に面して「ジョウ（門）」を作る。格式によって屋敷地の大小はあっても、基本的には同様の構成・配置を持っていた。そして、こうした画一的な屋敷が井然と段丘に並行していることが、四個の顕著な特徴だったのである。

したがって、登野城・石垣・大川・新川の間切境となる南北の坂道は、屋敷地の側面の石垣と接するが、この面に「ジョウ」を設けることはなかった。そこで、近代には、この部分の石垣を崩して小屋を作り、小店とする場合が出てきたのである。こうして、「マチヤグァー」が生まれ、やがて坂道に沿った小規模な商店街を作ることになる。そして、これは、「ジョウ」や「ヒンプン」を崩して本格的な商家建築を作っていった東西に連なる「商店街（「アヤパニモール」など）」と異なる展開を示すのである。

以上のような区画の井然性は、今日も宮良殿内の周辺や石垣地区で観察することができる。

筆者の関心は、こうした構造をもつ市街地に、どのような経緯をたどって商工業が定着・発展していったのか、それを担った人々に、どのような特徴が見出されるのかといった点にある。王府時代の四個には、「参遣状」などから大和船と交易する民間の問屋のようなものがあったと言われているが、先に首里・那覇の場合にみてきた「マチ」「マチヤ」に相当するものは存在しなかったらしいのである。

『明治二七年五月　第二類　庶務書類綴（下巻）』[17]は、一八九五・六年（明治二八・九）に行われた沖縄県の地方制度改革（後述）のための取調べ調書と推測されるが、それには「市場・問屋・仲買人」について、次のような報告が含まれている。

㈣　一、市場問屋仲買の事

(1)　市場ノ位置

當地ハ市場無之モ　石垣島大川村海岸ニ於テ　本縣下那覇首里地方ノ者及他府縣県下ヨリ寄留者アリテ　群居ヲ致シ戸数七十三戸アリ　商業ヲ営ミ當地ノ市場トモ称スベキ位置ナリ

(2)　問屋之種類　数及所在地

當地問屋ヲ設ケタルモノ之無　穀菽類及海産物等ハ商人ノ手元ヨリ汽船及風帆船ニテ即宿ニ運送ス　貢租及貢穀ノ如キハ汽船ニテ運送ス

(3)　仲買人ノ種類其原籍別及数

仲買人ト称スルモノ之無　當地寄留之商人ハ概ネ雑商ニシテ　穀菽類私産物等ヲ小買シ纏メテ那覇ニ送ル　之レ仲買人ニ類スルモノトス　其重ナルモノヲ挙レハ左ノ如シ

一穀菽類及び縹草砂糖海産物ヲ買求スルモノ　弐名内鹿児島縣人壱名
　那覇人壱名

一穀菽類及び縹草砂糖及海産物ノ内　海人草　海鼠等ヲ買求スルモノ
　八名　那覇人

一漆料ノ紅露買求人　壱名　鹿児島縣人

一薪炭木材買求人　弐名　各那覇人

右之外　商人ハ僅少之賣買者ナルニ付之ヲ省ク

要するに、四個には決まった市場のようなものはなく、大川の海岸付近に他府県・沖縄本島からの寄留者が群居して七三戸もあり、ここが市場のようになっていた、ということである。また、問屋らしいものもなく、仲買を行っている商人には鹿児島県人と那覇からきた者がいた、というのである。

この記事の数年前、一八九〇年（明治二三）に、塙忠雄が八重山に赴任して、八重山の全村落を調査して詳しい村絵図[18]を残している。そのうちの四個の図[19]には、石垣の東外れの浜から大川の前浜にかけて、小さな小屋のようなものが五〇個以上書き込まれており、そこに「小屋」と付記されている。また、四個を間切りごとに個別に描いた図のうちの「石垣村之図」「大川村之図」にも、これに相当する同様の長屋が描かれており、これらの小屋が「大川村海岸ニ於テ　本縣下那覇首里地方ノ者及他府縣県下ヨリ寄留者アリテ　群居ヲ致シ戸数七十三戸」に関わっていると思われる。

そして、一八九〇・九一年（明治二三・二四）の『沖縄県統計書』によって八重山の「出入調査」の結果をみると、一八九〇年には、大浜（大川・登野城）・石垣（石垣・新川）をあわせて、他府県から入った者が七一名、他地方（主として沖縄本島）から入った者が二六〇名、周辺離島から来た者が一七九名と数えられる。このうちの他府県からの移住者は大浜に集中しており（本土から来た官吏・商人等が含まれると考えられる）、これに対して、他地方（沖縄本島）からの寄留者は石垣の方に集まっている。後者には糸満漁民が含まれ、彼らが石垣の前浜から新川方面に定着したことを示すとも考えられ、町の中心にあたる大川・登野城には本土出身者が多く、石垣・新川に本島出身者が多いことも、両者の立場

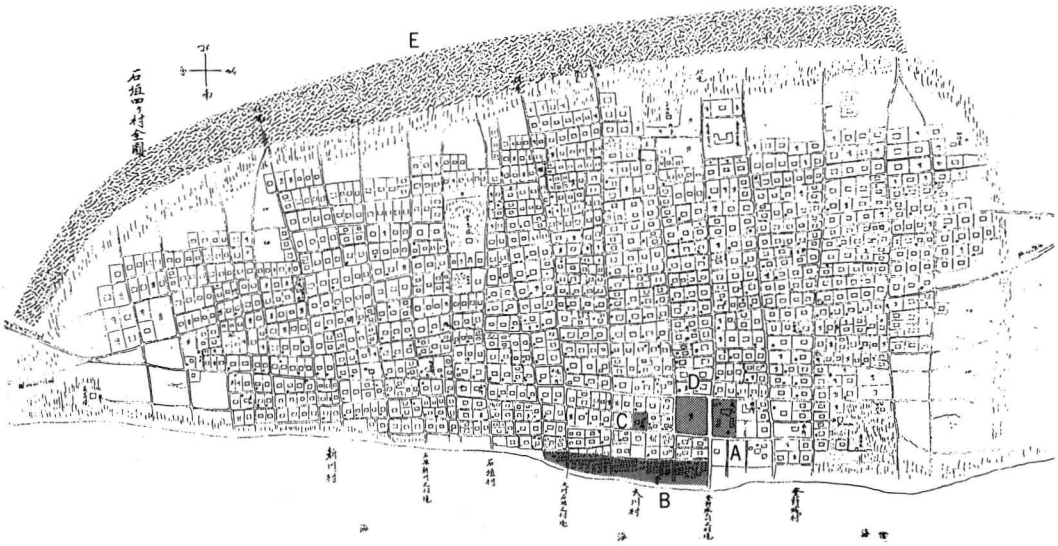

図3　明治時代の石垣四個の状態
塙　忠雄作成「石垣四個全図」に加筆。

A．蔵元跡（八重山支庁）
B．大川地先浜の小屋。この当時、この浜が魚介類取引で賑わっていたことが分かる。
C．大川番所跡（現公設市場）この時点では、登野城・大川・石垣・新川各間切番所ともそのまま残っている。
D．現郵便局所在地。この時点では「明」と記入されており、空地だったことが分かる。
E．墓地域

の違いを示しているとみることができる。

続く一八九一年には、他府県からの寄留者は一〇〇人を越えており、本島出身者もほぼ三〇〇名に増加し、この時期に本土および沖縄本島からの寄留が活発であったことを表している。しかし、この時点でも周辺離島からの寄留者の方はほとんど増加せず、宮古諸島からやってくる者もごく少なかったようである。

以上のような状態の四個が、この時期以後にどのように「町」を形成し、都市化していったのかを、商業の興隆といった側面から以下に検討していくことにしたい。

そこで、今日の石垣市を構成する人々を、出身地域ごとに分けて、その特徴をみていくことから始める。取りあえずは、次のように区分することが可能であると思われる。

第一のグループは、蔵元の役人あるいは間切役人層につながる旧四個以来の居住者で、当然ながら、かれらは旧士族身分を持ち、本来の四個はこの階層の人々の居住地域であった。この人々がどのように商工業に関わったかは、改めて後述することにしたい。

第二のグループは、石垣・四個以外から移住してきた人々であるが、これらの人々を通称して「寄留民」といっている。そのなかには、本土出身者・本島出身者・宮古諸島出身者・周辺離島の出身者、が含まれるが、現在もっとも人口が多く、有力集団を作っているのは宮古諸島（宮古本島・池間島・下地島・多良間島など）の出身者であるといわれており、それに次いで周辺離島からの移住者である。

これらの人々が四個に移住してきた時期は、時代的に前後がある。簡単にいえば、廃藩置県後に四個に寄留してもっとも早く商業活動を始めたのは、本土と沖縄本島からの移住者であった。これに対して、宮古諸島や周辺離島の人々の移住は遅れて、かれらが四個に多数居住するようになったのは、昭和時代、それも主として戦後のことである。本土からの寄留民については後に具体的に示すことにして、ここでは沖縄諸島内部の人的な移動からみておこう。

(一)　本島・首里・那覇からの寄留

初めに沖縄本島からの移住者の特徴を概観しておく。

沖縄には、一八七九年（明治一二）の廃藩置県後に本土資本が殺到するが、八重山についても、一八八五年（明治一八）の三井物産による西表炭坑の採鉱開始（一八九五年（明治二八）以後は大倉組の経営）を一例として挙げることができる。また、一八九一年（明治二四）に制定された「八重山開墾規則」を受けて、本土から八重山への開拓移民も各種実行され、こうした開拓団を基にして八重山で近代的な製糖事業が開始されるようになる。こうしたなかで、本土資本の進出に対抗するように、尚家を中心とする沖縄本島資本も鉱業・開拓事業・海運業などに乗り出すが、八重山についても、スーナ（椎名原）などに開拓農場を設けて旧首里士族を募り、一八九二年（明治二五）には二七〇余名が入植することになった。[20] このうちの四〇余名はマラリヤに倒れるなどして、開拓計画そのものはやがて頓挫するが、『琉球新報』一九〇五年（明治三八）八月三日によれば、その後も留まった者が、この時点で二三戸あり既に一村の状態になっていたという。[21]

周知のように、一八九四・九五年（明治二七・二八）の日清戦争後に台湾が日本の領有に帰したが、それにともなって、地理的に台湾に近い八重山が注目を集めることになり、一方、一八九五・九六年（明治二八・二九）には、沖縄県の地方制度の全面的な改革が実行されて、[22] この時期から人の移動が急速に活発になっていった。こうして八重山は南の新天地とみなされ、冒険心を持つ本土・本島の人々が八重山に渡って、各種の商工活動に従事することになったのである。

『琉球新報』一九〇四年（明治三七）三月三〇日付の「八重山の開墾に就き」[23] には、次のように記述が見られる。

首里那覇辺の人にして四ケ辺に来住し商業等に従事する者少なからされとも開墾等に従事する者は「スーナ」原開墾人位に過きす。首里那覇辺に於て相当の労役に耐えるものなれは八重山の四カ村辺に来住して働けは楽に暮らし得るのみならす相応の資産を作ること容易なりと或人の談なり。成程無一物にて来住し、今や多大の資産を揃え八重山に於て財産家として指を屈する者一、二に止まらす。

またあるいは、同新聞の一九〇五年（明治三八）九月五日の「八重山群島（十五）」[24] には、次のようにも記されている。

現今本島（石垣島）の商界は石垣島大川村の海岸近き一部落を以て其の中核とし此処に他地方他府県より来たり商業を営むもの百戸内外各々居を構へ専心斯業に従事せり。

而して従来本群島に於ける商営業者は大小となく概して成効せるものごとし。

今その一例を徴せんに当時郡内第一流の実業者と称せられるゝ某の如き去る明治二十六、七年の頃までは僅かに牛馬骨の取引を為し以て漸く渡世の煙を立て居たりし人なるに経営其宜しきを得て漸次資を増し産を殖し今や十年の今日に至りては自ら第一流の資産家を任じ人亦栄称を許すに至れり

このような風説・評判の下に、本島からやってきた者たちの営んだ業態に反物屋、鍛冶屋、雑貨商、泡盛販売などがあり、それなりの成功を収めた者も少なくなかった。先に引用した一九〇五年の新聞記事には、四個の商業機関・店舗として「商業市場・仲買取引商即ち海産物取扱所・汽船取扱所・輸出品取扱店・理髪所・銭湯屋・獣肉魚肉の売場・諸工業製造家・料理店・宿屋・豆腐屋・その他の各種小売店」を挙げているが、その多くは本島出身者が経営しており、やがてこの地域の商工業の基礎となった。しかし、このような沖縄本島からの商工寄留民は、以後も引き続いてこの地に定住する者は少なく、ある程度成功すると、事業を畳んで本島に引き揚げていったのである。かれらが相次いで引き揚げていった時期は大正時代から昭和の初期にかけてのことであるといい、この当時、四個の商工民の一部に入替えが生じたらしいのである。

(二) 糸満からの漁民寄留

これとは別に、沖縄本島南部・糸満出身の漁民たちも漁場を求めて八重山にやってきて、やがて定住した。このことは広く知られている事実である。

糸満漁民が最初に石垣に渡来したのは明治時代初期のことで、上原某が二人連れで訪れて大川の浜地に小屋掛けをして、潜水漁に従事したのが始まりであるという。大田正議の地図（後述）には、大川の前浜に面した大田正松の屋敷地に「糸満発祥の地」と記入してあり、この屋敷地の一部を借りて、小屋を作って住むようになったのが定住の始まりであるという。

先に、大川の地先の浜の市場に言及したが、おそらく、これらも糸満漁民と関わるものであろう。この当時の石垣の漁業の中心は、潜水漁による海人草・海鼠・貝類などであった。このことは、先の一八九四年（明治二七）の資料に海人草・海鼠が特記されていることからも分かり、塙忠雄の描いた大川や石垣の前浜の小屋は、こうした海産物の取引にかかわるものだったらしいのである。

それ以後、糸満漁民は、本島から次々と「ヤトイングァー（雇用漁民）」を呼び寄せて潜水漁から追込み漁に発展して、この地域の漁業を開拓していった。そして、明治三〇年代以後に、鰹漁・鰹節製造業を中心にした盛期を迎えることになるのである。(25)

ところで、糸満漁民は、漁民集団として固有の生活習慣を伝承し、それを比較的によく保存してきた。そして、今日まで「ハラ」に示される親族組織を介して「シマ」とのあいだに強い結びつきを保ち、すでに数世代を経ているにも関わらず、現在も石垣に墓を作ることはないのである。かれらは、焼骨した骨（以前は洗骨をした）を糸満に持ち帰り、「ハラ」墓に埋葬する習慣を持っており、この点が首里・那覇出身者と大きく異なるところであった。

(三) 宮古諸島・周辺離島からの寄留

もっとも新しい時代に、主として戦後に移住してきたのが、宮古諸島・多良間島あるいは周辺離島の出身者たちである。

これらの島々からの移民の契機は様々であるが、戦前は決して多くはなかった。戦後、一九四九年（昭和二四）より「自由移民」としての八重山移住が始まり、一九五二年（昭和二七）に琉球政府が発足すると、この年より「政府計画移民（通常はこれを「計画移民」という）」の入植が開始されて、以後、「計画移民」の西表島などへの入植が続くが[26]、これらの人々のうちには、やがて再度移住して四個で暮らすようになった者も多かった。いわゆる「自由移民」の場合は、特に宮古諸島出身者が多かったといわれているが、かれらはかならずしも農業に従事するとは限らず、建築・土木業など、その生業は当初から多様であったという。

周辺離島は、戦後の引き揚げ者の増加などにともなって、人口が「シマ（出身島・出身集落）」の保持力の限界を越え、その結果、「シマ」から離れて町に移住するものが増えた結果、四個にも多数の離島出身者が移住・定着した。この傾向は、町と島のあいだの生活の利便差が拡大するにともない、ますます増加したのである。こうした離島出身者に移住の動機を聞くと、離島における子供の教育、病院などの生活環境の不備、あるいは仕事の不足を挙げることが多いが、こうして同郷者の数がある程度まとまってくると郷友会組織が生まれて、居住地も一定の地域に集中する傾向が生じたようである。そして、生業の選択にも「シマ」ごとの特徴といったものが生まれてくるのである。たとえば、竹富島の出身者は商業に従事している者が多い、あるいは宮古諸島・与那国島の出身者は土木建設業界で有力である、小浜島出身者は官吏が多い、などというわけである。これらの四個における離島出身者の様相は、さらに調査して改めて報告するつもりである。

以上のように、新しく四個に移住してきた人々は、「シマ」ごとに郷友会を組織して相互連帯を計り、これを通して「シマ」とのあいだに一定の関係を保持していることが多い。しかし、その一方で、かつて本土や首里・那覇からやってきた寄留民とは異なって、これらの人々は再び「シマ」に戻る意思はほとんどなく、この町に定住する傾向が強いのである。この定住指向を反映して、郷友会墓地・郷友会共同墓が設置されることになった。

那覇においても、郷友会ないしは職能集団（出身地を共通することが多い）を基に共同購入した模合（モアイ、催合の意）墓地が見られるが、四個の郷友会墓地はこれとは少し異なるようである。その方法は、郷友

会幹部の名義で市有地・個人所有地を借り受けて、これを整地して墓地域にあてるのである。沖縄の一般的な墓地観からいえば、墓地は個人または門中で所有すべきもので、墓地の売買はあっても、借地の上の墓は成り立たないはずであるから、その意味では異色のものである。

郷友会墓地は、入手した借地を決まった規格の区画に割って、ごく僅かな費用で個々の郷友会構成員に貸し付けて、墓そのものは各自が自由に作るものである。八重山では「個人墓」と称して、兄弟が墓を異にする習慣(長男が親の墓を継いで、次男以下は新しく築墓する)が行き渡っているから、構成員が次男以下であることが多い郷友会にとって(長男は相対的に「シマ」で暮らす可能性が高い)、墓の獲得は重要問題であった。その解決策として考え出されたのが郷友会墓地なのである。

また、郷友会墓地には「共同墓」が付設され、構成員が個別の墓を作るまで、仮に納めるようになっているものもある。というよりも、郷友会墓地は「共同墓」から始まったもので、戦後にできた宮古出身者の「共同墓」が最初であるといい、この「宮古共同墓」は、現在も産業道路の脇に残っている。

この種の郷友会墓地には、竹富島・波照間島・鳩間島・西表島・網取(西表島の廃村)・新城島・多良間島・与那国島など、周辺離島ごとに作られたものと、宮古諸島の平良・伊良部・砂川・比嘉・長間・七股など、細かく集落ごとに分かれている場合とがある。この他に、台湾からの移住者たちも台湾式の埋葬方法による台湾墓地域を作っている。[27]

(四) 本土からの寄留民

四個には多数の「ヤマトゥンチュー(本土出身者)」が寄留してきた。もっとも影響が大きかったのは、西表炭坑の開鉱や開拓移民の集団渡来であったろうが、これと同時に多くの商人も来島し、四個に「ヤマトゥマチヤ」を作って商工に関わり、[28]初期にはこの地域の商業の主要な担い手として今日の石垣の町の形成に大きな影響をあたえた。しかし、これらの「ヤマトゥンチュー」も八重山に永住した者はそう多くはなく、大方はやがて島を離れて本土に帰っていった。これについては具体的な事例を後に示すことにしたい。

(五) 移住民の定着傾向

以上に見てきた四個に寄留した人々は、その定着度の強さから類型化できると思われる。

このなかでもっとも定着率の低かったのは、とりあえず本土出身者であると考えられる。もっとも、四個の一般墓地を端から見て歩くと、家名の刻まれたもの(古い墓は家名や埋葬者の氏名などはない。家名の記入は石碑の建立とともに、新しく普及した習慣である。)のうちに、案外に本土の姓を発見することが多い。遺族はその後に移動してしまっても、死亡した人の墓は生活した土地に作る場合が少なくなかったであろう。しかし、これについて詳しい調査はまだおこなっていない。

次に定着度が低いのは、沖縄本島の出身者であると考えられる。当初

に本島（主として首里・那覇。その後に山原出身者が増える）から寄留してきた人々は、ある程度の蓄財ができて相応の年齢に達すると、家族一同を伴って本島に戻っていくものであった（四個の女性と結婚した場合など例外はある）。山原出身者の場合は、本島に戻るといっても、「シマ」に帰省するのではなく、多くは那覇に移住して余生を暮らし、そこに墓地を作る場合が多かった。だから、四個に骨を埋めようとはしなかった、といってよいであろう。

もっとも、新しい時代に計画移民などで移住してきた人々は、離島出身者と同様に定着する傾向が見られ、四個の一般墓のなかには、本島出身者とみられる姓が刻まれた墓が少なからずある。しかし、離島出身者と異なるところは、集団で墓地を作らず、個人がそれぞれ市営墓地などに墓を得ている点である。山原出身者のなかには、郷友会組織を持っている場合があるが（大宜味村の一心会など）、それが郷友会墓地は作ったという例はないようである。

また、同じ本島出身者であっても、既述のように糸満漁民は異なる。かれらは数代にわたって八重山に住み、今日では新川・登野城や新栄町にすっかり定着しているが、それでも死亡したら糸満に戻るもの、と考えている。だから、糸満漁民の寄留とは、生きている限りのものでもある。もっとも、最近では各地の糸満集落で「シマ」との関係が少しずつ薄れてきて、墓を寄留先に作る事例が増えてきたというから、四個でも今後変容が生じるかもしれない。

最後に、周辺離島の出身者の場合、「シマ」との関係を基にして郷友会を作っているが（郷友会の政治・経済的な役割は大きい）、にも関わらず、実際には徐々に「シマ」とは疎遠になって、四個に定着しようとする傾向が強まっているといえる。郷友会墓地はその一例であって、子供たちが異なった「シマ」出身者のあいだで結婚する場合が増えたこともこの傾向を促進している（「シマ」出身者と結婚した者は準会員になることが多く、その結果、二重所属が増えてくる）。

また、東京・大阪・那覇などには「シマ」の住人の数十倍もの「シマ」出身者が暮らしており、かれらもまた郷友会を組織しているが、基本的にはすでに都市生活者であって、四個の居住者もこれらの都市生活者と直接・間接にリンクして、子供たちが東京・大阪・那覇に暮らしている例も多い。[29]

こうして、なかには「シマ」に残してきた先祖の墓を廃して、自分たちの居住地に移動してしまうという場合も出てくるのである。

このように、四個の「寄留民」の様相は、出身地が多様であると共に、寄留の契機、その後の変遷、あるいは石垣の「町」の形成にどのように関与したかも、また多様である。以下では、聞き取り調査を資料で補い、石垣の「町」の具体像を筆者なりに整理しておきたい。

七　記憶のなかの石垣

既述のように、明治時代後半以来、石垣・四個は少しずつ「町」の機能と形態を獲得してきたが、その過程を知る手がかりとして新聞記事が

あり、石垣市史編集室の手によって『石垣市史・資料編・近代』として三巻にまとめられている。

また、より具体的な様相を知りえるものに、一九〇四年（明治三七）生まれの大田正議氏が、記憶をもとにして明治時代末期から大正・昭和時代の四個の状況を復元した絵画資料とその解説がある。これは一九八七年に石垣市立八重山博物館において『絵で偲ぶ大田正義の我が島「バガスマ」展』として公開され、その際に同名の図録が出版されている（以下、本稿ではこれを「図録」と表記する）。

一九九〇年に筆者は、「図録」に収録されている石垣商店街の地図と、その解説をもとにして、さらに詳しく大田氏から直接のご教示をいただいた。ここでは「図録」に記載の内容と大田氏からお聞きしたものを併せ、さらに他の聞き取り調査も参考にして、当時の様子を示してみることにした。ここで「記憶のなかの石垣」としたのは、主に大田氏の記憶によっているからである。

以下では、これまでの記述とは順序を変えて、本土出身者の商工業から見ていくことにする。

㈠　本土寄留民の商店（ヤマトゥマチヤ）

「図録」には、大田氏が制作した商店街地図が「明治・大正時代大川を中心とした商店街の見取図」[30]として収録されている。ここには総計八一軒の「マチヤ」（八重山では「クヤー（小屋）」と表現するが、ここでは那覇の表現に統一して「マチヤ」を使用する）が書き込まれており、明治時代末期から大正時代初期にかけて急速に「町」化して、かなりの商店があったことが分かる（これには、病院・造船所・倉庫・公共浴場・鉄鋼所・マラリヤ防疫所・第百四七銀行代理店なども含まれており、必ずしも「商店」に限定されてはいない）。

そして、このうちのほぼ六割にあたる五〇軒ほどは、本土出身者の営業する「ヤマトゥマチヤ」であった（病院その他を除外すると、その比率はさらに高まる）。そして、この「ヤマトゥマチヤ」には、浜崎商店・古賀商店・野添商店など、すでによく知られた有力な寄留商人が含まれるが、同時に、今日ではほとんど忘れられてしまった小商店も少なくない。

浜崎商店は、鹿児島・指宿の出身者の経営で、那覇と八重山のあいだに浜崎丸を就航させて雑貨・壷瓶類などを移入し、雇人を使ってそれを村々に売り捌く一方、煙草の元売店に指定されるなどした。さらには鰹節製造業にも進出して、当時の石垣の商工業の中心的な役割を担っていた。

古賀商店は、海産物取引で成功して、併せて砂糖取引業もおこなった。前出の新聞記事には「古賀辰四朗氏の如き本島（石垣）に於いて熱心に此業（海産物取引）に従事し巨利を博いつゝあり。同氏の大阪博覧会に出品せし本島産の貝細工の如きは時に非常なる高評を博し、云々」とあり、具体的な貝の種類として夜光貝・高尻貝などを挙げている。

その他の有力な寄留商店も、類似の商法を採って島外との交易を支配していくが、こうした有力寄留商人たちは、港に近い大川の市街地の中

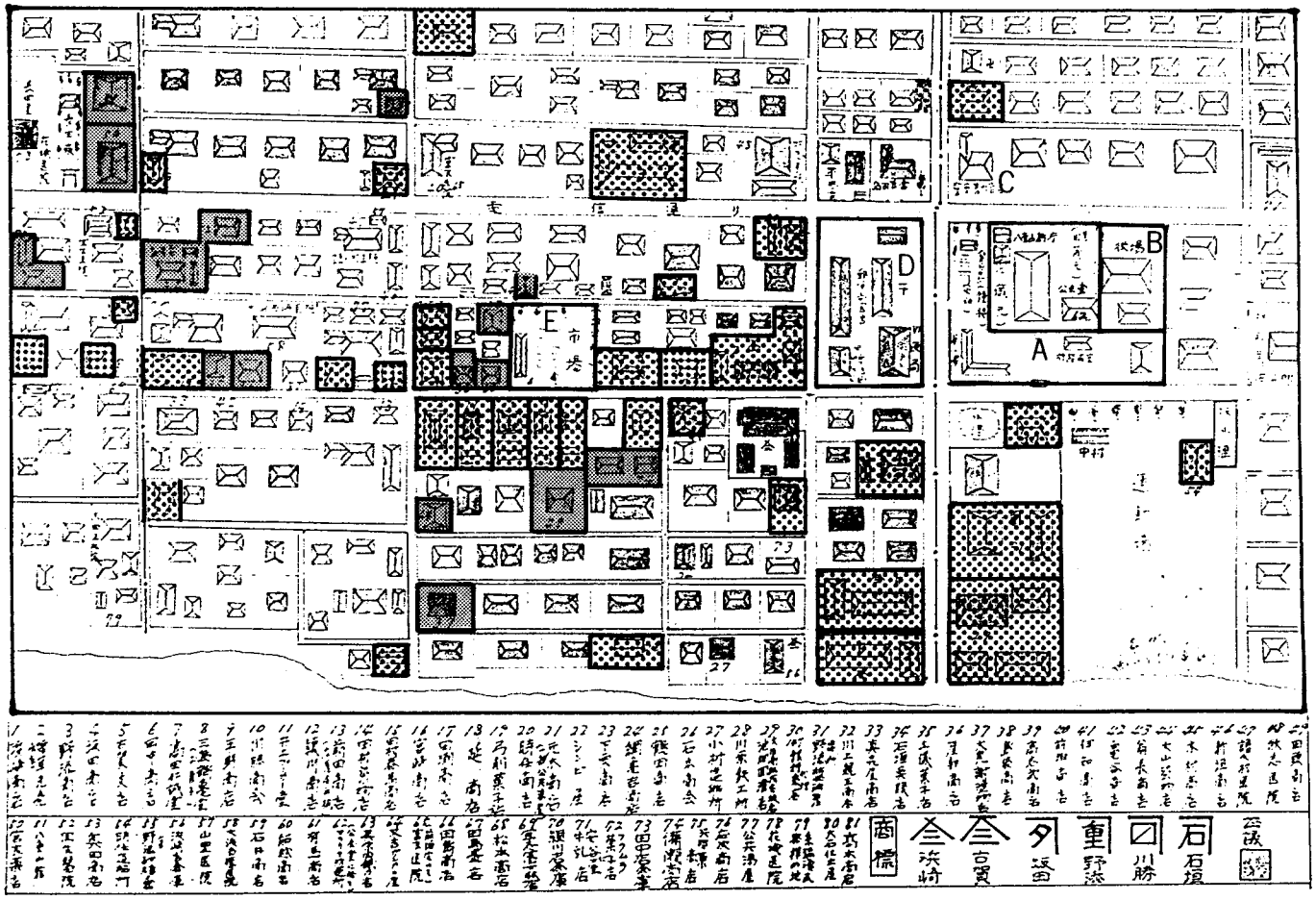

図4　明治大正時代の商店分布

大田正義画「明治大正時代大川を中心とした商店街の見取図」・石垣市立八重山博物館蔵に加筆。

A．蔵元跡（八重山支庁）
B．登野城番所跡（役場）
C．警察署
D．郵便局
E．大川番所跡（市場）

原図には「市場」の西側に肉売り場の小屋が、空地の中ほどには、魚・野菜を置く連台が描かれている。

はヤマトゥマチヤを示す。

はウチナーのマチヤを示す。

心に土地を入手して、そこに本土風の商店を建てて営業していた。

明治三〇年代には、八重山でも鰹漁がおこなわれるようになり、大川につながる石垣の前浜には、季節的に鰹節加工を行う浜小屋が建てられるようになったという。それが明治時代末期から大正時代初期にかけて、富崎観音堂の先のフナジ石近くに工場を移動し、鰹節加工業は重要な地場産業になっていく。その経営者には、糸満出身の漁民と本土出身の寄留商人が含まれている。当初の鰹節業の経営者は、宮崎治三郎（本土出身者）・玉城三良（ヒジャグァー、糸満出身者、玉福丸船主）・大城加那（糸満出身者、白銀丸船主）であったが、やがて、再度、新川に移動して規模を拡大していった。

「図録」によると、新川に移動した段階の本土出身経営者として六名記録されており、浜崎商店をはじめとして、坂田商店・川勝商店・宮崎商店など他業種で成功した「ヤマトゥマチヤ」が名を連ねている。

かれらは、当初は日用雑貨・反物・酒・茶などを本土や沖縄本島から移入し、あるいは醤油製造にあたるなどしていたが、やがて砂糖・鰹節・八重山上布などの八重山の主要産品の本土への移出業務を支配することによって有力商店に成長していき、同時にこれらの「ヤマトゥマチヤ」が旧四個の中心を本土風の商店街に作り替えていったのである。

このほかにも小規模の本土寄留商人が相当いたようで、かれらは屋敷地の一部を借り、石垣を崩して小屋を作って店にしていた。

一方、地主が小商人を目当てに屋敷地の角に小屋を建て、これを貸す場合もあったが、これは本島出身者が利用する場合が多かったようである。

この他に、比較的早くから「サカナヤー（本土式料亭）」が四軒（大石料理店・浜の家・谷口料亭・青柳料亭）営業していたという。しかし、大正時代からは市場前につながる通りに料理屋・飲食店が集中して、これがいわゆる「十八番通」となって戦後に受け継がれたが、このころの経営者はほとんど地元の人たちで（一部は本島出身者）、本土色はすっかり薄まっていったという。これについては後述する。

(二) 沖縄本島からの寄留

大正時代あたりまで、旧四個で商工に従事した地元の出身者はほとんどいなかった。既述の本土出身者とともに、沖縄本島から渡ってきた者たちがこの時期まで商工の担い手となっていたのである。

「図録」に登場する本島出身者はおよそ三〇名ほどで、代表的なものに川上商店がある。以前は四個で「クヤー（小屋）」といえば、前述の浜崎商店とともに、この川上商店のことを指すものであったといい、この二店がもっとも著名であった。

川上商店は、当初は沖縄織布（本島産の琉球織）の行商販売をおこなっていたというから、那覇の「フルジマチ」につながる者であったと考えられ、さらに推測するならば、この店で取り扱った沖縄織布とは、初めは古着のことではなかったかと思われる。この時期に、沖縄全島に古着が広く流通したことは、先に那覇の「フルジマチ」のところで指摘したことであるが、興味深いことは、川上商店は琉球織を商っていたにも関

わらず、八重山産の上布の買い付け業をおこなっていないことである。このことは、貢布制度が引き続き継続していたことにも関わるが、本土の寄留商人が、各種商品の移入によってある程度の資産を形成すると、今度は八重山の特産品を本土に移出して利益を得る方向に向かったことと対称的である。

例えば、浜崎商店は、浜崎丸を運行して本土・本島産の商品を移入・販売していたが、後に煙草の元売商となり、また、鰹節製造業を併せて行う。野添商店は、本土産の日用雑貨・反物の販売とともに醤油製造業を始め、貢布制度が廃止されると、八重山上布・砂糖の買付け・移出業も行うようになった。坂田商店は、茶の販売業とともに鰹節製造業に乗り出し、田中商店も茶の販売業に併せて煙草葉の買付け業をおこなった。このように本土の寄留商人は、取り扱う商品を替えながら移出業を拡大していくが、川上商店は沖縄本島からの一方的な商品移入・販売を継続していたのである。

いずれにしても、代表的な本島出身者の「クヤー（マチヤ）」であった川上商店は、昭和初期に一家をあげて本島に引き上げて行ったという。

後に一覧で示すように、本島出身者の活動はいずれもこれに類似した特徴を持ち、八重山産品の島外移出には積極的に関わらず、沖縄本島産の商品を移入して商い、あるいは首里・那覇に伝承する技術を八重山に持ち込み、沖縄の伝承的な商品の製作・供給に従事してきたのである。

そうした商品には、先の琉球布・泡盛・壷屋焼の「ジーシガーミ（厨子瓶）」・壷・瓶などがあり、この他に漆器・指物・下駄・線香・盆提灯、あるいは素麺・菓子の製造、泡盛の醸造など、日用品や食品の製造業を興した。また、職人仕事には、鍛冶屋（「ヤンバルカンジャー」・山原鍛冶屋）・大工（八重山の大工には大和大工・沖縄大工・地元大工の系統があったという）・畳屋・漆喰作り・漆喰塗（瓦葺職）、ブリキ細工・「ジーファー（簪）」の製作、などが含まれている。

このなかには、沖縄芝居の興業にともなって、役者あるいは座付き台本書きとしてやってきた人々の転業も含まれている。屋部商店も比較的古くから営業していた本島系の店であるが、初めは芝居の役者として渡来した人の経営であったという。屋部商店は、壷屋焼の瓶・壷、板線香、ウチカビ（紙銭）などの一手販売をおこない、それ以外にも色々の雑貨類を取り扱ってきたという。

以上のことを要約すると、次のように言うことができるであろう。

それは、取り扱う商品が在来の沖縄の生活文化（首里・那覇を中心とする）に関わるものに限定されていることである。沖縄本島、それも主に首里・那覇に継承してきた暮らしぶりを伝えるものを中心に商業活動をおこなっているのである。いいかえれば、八重山の人々は、この時期に至って、これら本島出身者の活動によって琉球商品を容易に入手できるようになった、ということなのである。

したがって、本島出身者が取り扱った商品は、本土の寄留商人たちがもたらした商品とは質的にまったく異なっていた。

本土の寄留商人は、伊予絣や有田焼を移入して、国旗・大漁旗を持ち込み、あるいは洋式楽器・文房具・時計・小間物などをもたらした。そ

の一例をあげれば、一九〇一年（明治三四）四月一一日の『琉球新報』に、大川に出張して「玉振・懐中・八角・目覚」など各種の時計を月賦で販売するという広告が掲載されている。[31] もちろん、当時は時計を購入できる人などごく限られていたであろうが、こうして八重山の人々は近代的な商品文化に接触していったのである。これに対して、本島出身の寄留商人の果たした役割は、王府時代以来の伝統的な沖縄文化を改めて普及させた点であった、ということになる。

そうした本島文化のなかで、特に目につくものに、首里の泡盛醸造技術の伝播がある。これには、一八九八年（明治三一年）の自家用酒製造の全面禁止（西表島・黒島・波照間島・与那国島など一部の離島は、大正年間まで特別に許可されていたという）にともなう市販泡盛の需要の拡大が影響していると考えられるが、新垣酒店（首里出身者）をはじめ、玉那覇酒店（本島出身者）・浦添酒店（地元出身者）が、次々と首里から専門の醸造職人を呼び寄せて、八重山に本格的な泡盛醸造業を起こすことになった。その技術がやがて地元の職人に伝授されて今日に至るのである。[32]

また、前述の尚家の椎名原などの開墾事業に伴って移住してきた旧士族農民のうちには、やがて四個に出てきて、なんらかの商業活動をおこなう者がいた。かれらは、開墾地で使用人を雇って商品作物を耕作させながら、自らは四個で野菜・芋・穀物などの販売に従事していたのである。この時期までの八重山の農家は、野菜を栽培して商売にすることなど考えもしなかったといい、自家消費の残りを四個に運んで商う程度のものであった。改めて後述するように、そもそも四個には「ナファヌマチ」のような本格的な市場はなく、本島・首里の上層士族が配下の特定の農家から野菜などを届けさせていたのと同様に、四個の士族も自家の菜園を利用するほか、直接に農民から入手していたのである。

椎名原農場出身で野菜販売に従事した者に、亀谷・島袋・与儀・翁長などがいたが、子供が教員となって八重山に残った者のほかは、いずれもやがて本島に帰っていったという。

(三) 市場と地元民の商業

「図録」に含まれる「明治・大正時代大川を中心とした商店街の見取図（以下では見取図と表記する）」では、大川の中央の空地（「オーセ（大川番所）」の跡地）に「市場」と書き込まれている。この地点が現在石垣市の公設市場が開かれている場所にそのまま当てはまる。すなわち、「オーセ」跡の空地が「マチ」となって、今日の公設市場に受け継がれているのである。

「図録」にはこの市場の簡単な素描があり、その説明によると、敷地の西側に、肉売場である板葺き小屋（後に瓦葺きとなる）が設けられており、東側には、魚売場と野菜・豆腐売場があった。魚売場・野菜売場には小屋などの施設はまったくなく、ただの広場であったという。簡単な板台を持ち出し、魚や野菜をのせて商う形式だったのである。ここに商品を持ち込み、販売に従事したのは、周辺の村から芋・野菜などを運んでくる農家の女たちや、魚介類を商う糸満出身の女たちであった。

ところで、塙忠雄の残した村絵図のなかの四個の絵地図では、この場所は「番所」と記入されている。したがって、一八九〇年の時点では、ここはまだ市場ではなく「大川番所」だったのである。[33]

それが市場になったのは、一八九五・九六年（明治二八・二九年）におこなわれた地方制度の一連の改訂にともなって、大川番所が廃止された結果であると推測される。この時点で、石垣・四個の行政単位は再編され、大川・登野城が合併して大浜間切（登野城番所扱い）となり、石垣・新川に名蔵を加えて石垣間切（石垣番所扱い）となった。その結果、旧大川番所は使用されなくなり、跡地が「市場」として利用されることになったのである。

しかし、このことは、大川番所跡地に「市場」ができるまで、四個に市場がなかったことを意味するわけではない。

先に引用した『明治二七年五月　第二類　庶務書類綴（下巻）』では、大川の前浜の寄留地を市場に見立てているが、これとは別に、この当時すでに萌芽的な「マチ」と呼びうるものが、現在の郵便局所在地付近に生まれていたらしいのである。

一八八二年（明治一五年）に八重山役所内に設置した郵便局は、やがて一八九七年（明治三〇）に「二等郵便及び電信局」となり、この時点で、専用の建物が作られたのだと思われる。

大田正議の「見取図」には、蔵元の西に隣接する広い区画の南端に「旧電信局・郵便局」と書き込まれており、この区画の中心部分には「郵便局」および「郵便局官舎」が描かれている。この地図上の「旧電信局・郵便局」が、おそらく一八九七年に開設したもので、その後に新しい「郵便局」「郵便局官舎」を敷地いっぱいに建築、拡充したのであろう。この区画は現在の石垣郵便局に受け継がれている。

一方、塙忠雄の地図では、この区画は広い空地のままになっており、「明」と記入されている。

王府時代には、この区画の道を挟んだ東側が蔵元（現石垣支庁）で、北側が一八七九年（明治一二）に廃止された在番（現石垣市立文化会館）であるから、この区画にも蔵元に関わるなんらかの公的な施設があったと推測されるが、それが何であったかはまだ調べていない。いずれにしても、一八八〇年（明治一三年）に八重山に初めて小学校が開設されると、その時にこの区画が利用された。しかし、一八八六年（明治一九年）に尋常小学校と高等小学校が分離し、学校は他地に移転して、ここは空地になったらしいのである。

そして一八九七年（明治三〇年）に、二等郵便局がこの区画の南東端に作られたのであるが、区画の大部分はそれ以後も空地のままであったと推測される。

また、「図録」の解説によると、明治時代中期以後、大川番所跡地が市場として利用されるようになるまで、「電信局の南」に板張りの小屋があり、ここで肉を商っていたという。そして、後の大川番所跡地の「マチ」と同様に、ここでも、肉屋の周辺に各種農産物・魚介類を商う人々が蝟集したものと推測される。そうであるならば、八重山で最初に本格的な「マチ」の機能を持ったのはこの学校跡で、それは明治二〇年代のこと

であったであろう。そして、郵便局がこの区画いっぱいに拡充された時に、市場は大川番所跡地に移動したのである。以上のような過程を経て今日に至ったが、現在の公設市場は、七～八年前に新しく近代的な建物に建て替えられ、周辺もしゃれたアーケイド街に変わっている。

次に、「図録」に登場する地元商店の状態をもう少し詳しくみていくことにしたい。

「図録」に登場する商店などの総計は一三〇軒弱（支店も一軒と数えている）であるが、そのうち、沖縄県人（本島出身者及び四個出身者）の経営するものは半分に足らない六〇軒程度である。これには医院も含まれており、そのなかには地元出身の医師が五名いる。また、芝居小屋と公民館的な要素をもつ八重山会館も入っており、これらを除くと、四個の出身者が経営する商店は、僅かに一五軒程度に過ぎなくなり、本島出身者の経営する商店の半分にも及ばない。

解説によれば、そのなかで最も古いものは石垣呉服店であるという。この店は、大正時代に元教員が開業したものであるという。したがって、旧四個出身者が「クヤー（マチヤ）」を営むようになるのは大正時代以後のことで、明治時代末期まで四個の人々が経営する商店は存在しなかったのである。

石垣商店は、穀物・酒類・日用雑貨・衣料品を取り扱ったが、それらは主に本土産であった。平尾商店を経由して移入するほかに、大阪から直接に商品を仕入れるなどしており、同時に八重山上布を買い集めて大阪に出荷していたという。その一方、沖縄本島からも首里の泡盛・素麺・茶・板線香（沖縄線香）などを移入し、台湾米も取り扱ったという。また、一時期は鰹節製造業にも参加したが、これは後に廃業したという。こうして地元商店の代表的な存在となったのである。

このほかの地元商店として、薬剤店・菓子店・日用雑貨店などがあるが、いくつかの例外を除くと、その特徴は島外商品をほとんど扱っておらず、主に四個の周辺で入手できるものを対象にしていることである。したがって、その交易規模も店舗自体も小さく、永続性に欠けるものが多かった。このことは「見取図」に記載されている地元商店と沖縄本島出身者による商店を選り出してみるとよく分かる。どちらも一軒家が少なく、小屋借り・間借りなどが多いのである。すなわち、借り物の「マチヤグァー」なのである。

ところで、先に「サカナヤー」について触れたが、「サカナヤー」の集中した地域（市場前通りの石垣側の延長上）は後に「十八番街」と呼ばれた。もっとも、ここに飲食店が増えるのは大正時代以降のことで、「図録」には一二軒の飲食店が挙がっており、十八番料亭とその支店が本島出身者の経営、宮崎亭が本土出身者、よかろう亭が与那国出身者であるほかは、石垣の人々が経営していたという。この時期には当初の本土出身者による「サカナヤー」の大半がすでに撤退していたもののようで、その後は地元の人々が中心になっていくのである。

「十八番街」は戦後に最盛期を迎えるが、それは壊滅した那覇の辻（遊廓）から女たちが大勢やってきたからであるといわれる。宮古・平良で「サカナヤー」といえば、辻言葉の通用する世界であったというが、四

個にも辻から流れてきた女たちが盛り場を支えた時代があったのである。

しかし、港の埋立地に美崎町が拓かれると、盛り場の中心はそこに移動して「十八番街」は相対的に廃れていった。そして、美崎町に旅館・料理店などを開業して新しい繁華街を作っていったのは、地元の出身者ではなく、宮古島や離島から新たにやってきた寄留民だったのである。

八　石垣四個の明治・大正時代の商店

以上にみてきたように、石垣・四個の「町」は、経営者の出身地によって商売の領域・規模が異なり、また時代によって入れ替わりがあり、いくつかの節目を経て今日の形態を生み出してきた。以下に「図録」を整理して商店の一覧を示しておく。

(一)　「見取図」に記載された商店

(a)　本土寄留民の経営

浜崎商店　鹿児島県指宿の出身。川内に引き揚げる。那覇・八重山間に浜崎丸を就航。日用雑貨・穀物・酒類・焼物・瓶・壷等を移入。行商人を雇うなどして販売。

同煙草元売り店

野添商店　九州出身？　終戦後までおり、孫が沖縄本島にいる。雑貨販売。砂糖・上布の卸業（移出業）。

野添醤油製造業　野添商店の一角で醤油製造。

坂田商店（クマダ）　茶・鰹節製造業。

古賀支店（クガドン）　先閣列島に手をのばす。海産物取引・砂糖委託販売（移出業）。

田中商店（シタバーヤ）　鹿児島出身。茶卸及び小売り・香皮・煙草下葉の委託販売（移出業）。

高田仁誠堂　薬種の販売。

三島鶴亀堂（ミシマクワシャー）　大阪出身。菓子販売。

平野商店　船具類・ロープ・ペンキ類の販売。

川勝商会　名蔵に製糖工場を持つ。砂糖委託業・鰹節販売。

井上プーカー堂　日用品・雑誌・小間物・プーカー（？）などの販売。

頴川商店（エガワ）　日用雑貨・穀物・木炭委託販売。

前田商店　瀬戸物・焼物販売。広運社代理店。

田村森太郎商店　旗類（内地式の大漁旗・芝居の幕）・衣類・糸類の販売・染物業。

田村春馬商店　日用雑貨・穀物販売。

宮崎商店　日用雑貨・鰹節製造業・料亭経営。

田淵商店　蓄音機・洋楽器・ラッパ。

延商店　日用雑貨・衣類。

弓削菓子店　妻は宮良出身。菓子製造。

時任商店（トキトウ）　日用雑貨・船具・船釘販売。
元木商店　下駄・草履製作販売。公共浴場。
シンビ屋　日用雑貨・駄菓子販売。
下栗商店　日用雑貨販売。
網亀吉商店（アメカメ）　日用雑貨・伝馬船による海上運搬業。
鶴田商店　横浜まずだやの番頭。日用雑貨・漬物卸業。
石本商会　海産物・貝・海草・海人草販売。
大山染物店　大阪出身。衣類の新調染め・染直し業。
高木商店　国旗の製作。洋服仕立・修理。日用雑貨・履物の販売。
木村商店　文房具・売薬販売。
奥田商店　八重山上布取次販売（移出業）。
有馬商店　日用雑貨・文房具・教科書。
石井商店　日用雑貨・木炭卸・小売業。
田島商店　日用雑貨・酒類。西表炭坑への野菜供給。石炭委託販売（移出業）。
田島畳店　田島商店の副業。
大石仕出屋　巻寿司・稲荷寿司・バラ寿司・料理の仕出し。
頴川商店　倉庫。木炭保管。
田中商店　倉庫香皮・煙草下葉の保管・荷造り。
時任造船所　伝馬船・発動機船の製造。
野添砂糖倉庫　野添商店の倉庫。砂糖販売委託（移出業）。
浜崎商店倉庫　浜崎商店の倉庫。鰹節加工用具・漁具収納。
小村造船所　木造船製造。
川原鉄工所　器具修理・発動機船機械修理。
池端回漕店　大阪商船荷客取扱い池端運送店代理。
第百四十一銀行支店

(b)　沖縄本島からの寄留民の経営

川上商店（カーカン）　本島出身。浜崎商店と並ぶ古い創業。昭和初期に離島。沖縄織布（琉球織り）の行商販売をおこなう。
真喜屋商店　首里出身。子供が在島。日用雑貨・小間物・壷・瓶・農具販売。
与儀菓子店（ユーギヌクワシヤー）　借地。本島・西原出身。製造・素麺製造・薪販売。海上運送業（与儀丸を運行）。
屋部商店　本島出身。元は芝居の役者。妻は宮良出身。子供が在島。本島製の瓶・壷・線香・打紙（紙銭）など日用雑貨を販売。
大謝見塗物店　那覇・若狭出身（若狭には大謝見漆器店があった）。妻は宮良出身（ただし本島の血統）。指物・塗物（簞笥・朱塗）の製作販売。
島袋商店　本島出身。昭和一〇年代（？）に離島。日用雑貨・首里泡盛の販売。

高志武商店（タカシブ）本島出身。終戦後に離島。日用雑貨・壷・瓶・摺り鉢・焼物（那覇・壷屋の製品を移入。沖縄陶器は糸満出身者が用いた。地元の人は厨子瓶は購入するが、日用雑器は本土産を使用した）。

国頭商店　大工道具・釘・金物などを販売。

前泊商店　八重山上布の委託販売（移出業）・ラムネの製造。

伊知商店　日用雑貨・小間物の販売。

翁長商店　本島出身。椎名原開墾事業で来島。農産物・野菜・芋類の販売。

新垣商店　穀物卸・小売り。

船越商店　借家。本島出身。日用雑貨販売。

真栄里鍼力店　本島・那覇出身。大正時代に来島。ブリキ加工・修理。

又吉鍼力店（ガンガラヤ）　本島・那覇出身。妻は与那国出身。大正時代に来島。ブリキ加工・修理。簪の製作。

松本（元？）商店　本島出身。沖縄織布（琉球織り）の行商販売。後に伊予絣も扱う。

宜志富商店　借地。那覇・若狭出身。元来下駄職人であった。下駄製造（白木下駄・塗り下駄）。

与那原商店　借地。日用雑貨・穀類販売。

備瀬商店　本島出身？　日用雑貨・小間物販売。

応次商店　本島出身？　文房具。

亀谷商店　本島出身（士族？）。元は農業。椎名原開墾（丸一商店の事業）で来島？　農産物・野菜・芋類の販売。

牧之医院　本島出身？　内科・外科・眼科。

山里医院　内科・外科・産婦人科。

(c)　四個出身者の経営、その他の施設。

石垣呉服店　登野城校教員退職後に開業。地元出身の古参店。日用雑貨・穀物・酒類・衣類販売。八重山上布委託販売（移出業）。一時は鰹節製造。

安谷屋牛乳店　牛の飼育と牛乳販売。

譜久村菓子店　菓子製造販売。

譜久村医院

宮良薬店　医薬品・医療器材。

宮良長詳医院　八重山で初めての医院。

回生医院　内科・外科。

大浜当源医院　外科。

花城医院　石垣信智宅に開業。内科・小児科。

公共湯屋　もっとも古い共同浴場。

公会堂　諸行事・マラリヤ防遏所に使用。

八重山館　集会・映写会・芝居小屋などに使用した。

糸満発祥の地　大田正松宅に小屋掛けした。この小屋をナカヤグヤーと称して、繁栄したという。

(二)「見取図」に記載されていない大川の商店、その他

小村造船所　本土出身？

川村鉄工所　本土出身？

長島商店　本土出身？　蝶・蟬の額（お土産用）の製作販売。

柴田牛乳屋　本土出身？　借家。牛乳の製造・販売。

吉野医院　本土出身？

田頭商店　本島出身。後に離島。日用雑貨（タオルなど）販売。

仲宗根商店　本島出身。椎名原開墾事業で来島。野菜・芋類の販売。

安里鍼力店　本島・那覇出身。大正時代に来島。ブリキ製作。

新垣酒店　本島出身。八重山で最初の泡盛製造・販売業。

浦添酒店　四個出身。泡盛製造業。本島から職人を雇う。

大見謝挽物所　大見謝塗物店内にて挽物製作。

新垣畳店　本島出身？　借地？　畳の製造・販売。

大浜用要店（校長さんのまちや）　四個出身。借家。学用品の販売。

(三) 石垣・登野城などの商店

登野城及び石垣の商店についても一覧表示をしておく。

登野城の西側（大川寄りの一帯）は、現在も蔵元の跡地を中心に官庁街となっており、商業地域にはならなかった。また、登野城の浜際にはいくつかの工場があり、その裏手は空地であったが、やがて寄留者が住む地域のひとつになったという。

石垣は、石垣邸をはじめ士族住宅が比較的によく残り、店舗は大川番所跡から前浜に近い一帯に集中し、本島出身者の経営する小規模なものが多い。このような分布は現在も基本的には継承している。

近隣の平得、大浜にもわずかずつ商店があり、新川には鰹節工場が作られ、糸満漁民が集住していたが、後にその浜側に新栄町が作られた。

(a) 登野城の店

木場商店　本土出身？　借地。日用雑貨・小間物。

菊池商店　本土出身？　本願寺の宅地。日用雑貨。後に新聞社を経営。

中村鉄工所　本土出身。台湾から移住。機械・器具修理。

常深鉄工所　本土出身。機械・器具の修理・製作。

時任造船所　本土出身の時任商店の経営？

玉那覇酒店　本島出身。泡盛製造業。醸造職人として来島。

宮城商店　本島出身？　日用雑貨・食糧品。

宮良保備商店（ハイミンヤ）	四個出身。	日用雑貨・文房具。
登野城安昌商店（ヤーマンヤ）	四個出身。	日用雑貨・穀物・食糧品。
天川製材所	四個出身。	枕木・樽皮（タルガー。砂糖樽用材）その他の製材業。
天川挽物工場		天川製材所内にて挽物製作を行う。
(b) 平得の店		
真栄城商店	本島出身。	精米所を経営。椎名原開墾事業で来島？
(c) 大浜の店		
大城商店	本島出身。	米・芋・野菜の買い入れ業（馬で村回りをする）。
東恩納商店	本島出身。	米・芋・野菜の買い入れ業（馬で村回りする）。
瀬底商店	本島出身。	酒・ビールの販売。
(d) 石垣の店		
中村鉄工所	本土出身者。	台湾から移住。終戦後に本土へ引き揚げる。機械修理・製作。
小野商店	本土出身。	借家。日用雑貨・食糧品の販売。
森本商店	本土出身。	借家。日用雑貨・文房具・小間物の販売。
近藤商店	本土出身。	借地。日用雑貨・食糧品の販売。
森永商店	本土出身。	借家。日用雑貨・食糧品。
遊佐商店	本土出身？	日用雑貨・木炭卸業・小売り業。
高橋サキ商店	本土出身？	日用雑貨商。
古見造船所	本島出身？	造船・修理作業。
中村商店（ハークルーバーサン）	本土出身？	日用雑貨・食糧品販売。鰹節製造業。工場は新川。
新垣商店（アラカキノタンメー）	首里出身。	泡盛の製造・販売。首里から移入。四・五名の職人を首里から雇い製造。
新垣酒店	本島出身。	前出の新垣酒店の分かれ。泡盛製造業。養豚業を兼ねる。
玉那覇酒店	本島出身。	大正初期までは醸造職人。泡盛製造・販売業。
玉城商店（チラブタヤー）	本島・糸満出身。	日用雑貨・食糧品販売。時計修理。
喜屋武牛乳店	本島出身。	借家。八重山で初めての牛乳屋。牛乳の製造・販売。

比嘉商店　本島出身。大正初期に来島？　大正一五年ごろに離島。蝶・蟬などの額（お土産用）の製作・販売。

志良堂商店　本島出身？　大正初期に来島？　黒木製ステッキ・蝶蟬の額（お土産用）の製作・販売。

与儀商店　本島出身。椎名原開墾事業で来島。子供が在島。野菜・芋類の販売。

浦添商店　四個出身。前出と同じ。泡盛製造・販売業。首里から醸造職人を雇う。

石垣長泰挽物工場　四個出身。自宅。挽物製作。

(e)　新川の商店

篠原商店　本土出身。日用雑貨・食糧品・野菜の販売。

大宜見製材所　本島出身？　大規模な製材所を経営。枕木製材業。台湾に輸出した。

石垣長昌挽物工場　四個出身。指物・塗物・挽物。

(四)　飲食店・料理屋

既述のように四個の飲食店は、本土出身者による「サカナヤー」から始まったが、大正時代以後は本島出身者の経営による十八番料亭を中心にして、十八番通りに集中してくる。この時期以後の経営は地元民を中心にするようになり、これが戦後まで受け継がれていった。しかし、美崎町（大川・石垣の地先の埋立て地）・新栄町（新川の地先の埋立て地）が生まれると、歓楽街の中心は浜側に移動して、その経営者も宮古諸島・周辺離島の出身者に置き替わっていった。

(a)　登野城

浜の家料亭　本土出身。

(b)　大川

大石料理店　本土出身。

(c)　石垣

谷口料亭　本土出身。

青柳料亭　本土出身。

宮崎料亭　本土出身。大正以後に営業。

十八番料亭　本島出身。同　右

十八番支店　本島出身。同上の支店。同　右

東雲楼料亭　地元出身。同　右

花月料亭　地元出身。同　右

松月料亭　地元出身。同　右

菊家料亭　地元出身。同　右

田本料亭　地元出身。同　右

まぶねう屋料亭　地元出身。同　右

武士ちゃう料亭　地元出身。同　右
よかろう料亭　与那国出身。同　右

(d)　新川
菊水料亭　地元出身。大正時代。
（ラーメンヤ）

(五)　ソバ屋・その他

料理店の開業に先駆けてソバ屋（いわゆる沖縄ソバ。当地では八重山ソバと称する）が営業をしていたという。沖縄本島から来た人たちが営業して、本島の風のソバを普及させたものである。

また、テンプラ屋の開業も早かったようで、テンプラは手軽な間食として重宝され、現在も市場近辺で与那国出身者が営業している。

国吉そば店　本島出身。明治期に芝居師として来島。
岸本そば店　本島出身。大正時代の初めより営業。
ウシアンマーそば店　本島出身。
崎山そば店　本島出身。明治時代以来営業。
具志川小（グシカーグァー）　てんぷら屋。本島出身。
大田そば店　地元出身。

九　まとめにかえて

南島の「町」は、歴史的な都市や支配者居住地区を基にしながら、比較的に新しい時代に近代化に伴って展開・発達したもので、それなりの特色を持つ過程を辿ってきた。

那覇の商業空間は、「マチ」ないし「マチグァー」を基盤にしているが、その場合の具体的な場は、道（橋・樹木など特定の目印のある場。なかでも分岐点）・広場（空地。「モー（毛）」という）などであった。「マチグァー」は、道の分岐点などに生じた小さな商いの場であるが、「マチ」の規模になると、単なる道端では間に合わなくなり、なんらかの空間的な広がりを必要とした。こうして大道や特定の空地に、あまり境界の明確でない広がりを持つ「ナファヌマチ」や「シュリヌマチ」が生まれたのだと考えられる。

「マチ」がある程度の規模に成長すると、公権力による介入・規制が生じるが、その結果、市域が恒常的に固定化されて行政支配が明確になったという訳ではなさそうである。一時期の介入・規制が過ぎると、再び流動的な空間のままに放置される場合が少なくなく、その間に、使用者の内部に種々の権利関係が発生して慣習化し、やがて制度化される場合も生じたようである。

明治時代以後には、周囲を建物などで囲んで区画を限定した「市場」の形式が行政的に採り入れられたが、にも関わらず、牧之公設市場・農

連市場・開南周辺にみられるごとく、「マチ」は「市場」からはみ出して、無原則に周囲に広がる流動性を、今日も失っていない。

戦後の商業空間については中部のコザなどを含めて別に調査をおこなう必要があるが、ここでは取りあえず、那覇のガーブ川の両岸から川の上に張り出した堀立小屋がもとになり、次に川を暗渠にして今日のアーケード街になった過程に注目しておきたい。詳しい調査はまだおこなっていないが、この周辺には様々な地域の出身者が集まり、「マチ」に新しい要素を追加しているらしい。

以上のような自然発生的で同時に流動的な「マチ」の性格は、既述の石垣四個の前浜や学校跡地あるいは番所跡地の「マチ」の発生についても言えることであろう。

そして、このことは「マチグァー」ないしは「マチ」の場所割りや差配がどのように行われていたかに関係してくるが、まだ十分に調査をおこなっていない。これに関してよく指摘される点は、本土の「市」と異なって、その差配をおこなうテキヤ稼業が成立しなかったことである。

一方、前述の「マチ」や「マチグァー」が基本的に毎日立つものであったのに対して、季節的に開催される「マチ」もいくつかあった。

那覇・首里では、旧暦五月四日の「ユッカヌヒー」、旧暦七月九日の「クニチマチ（九日市。盆市）」はたいへんな賑わいを見せたといい、暮れには「シワーシマチ（師走市）」が立った。

「シワーシマチ」は、首里なら綾門通り、那覇なら大門通りから東町通りにかけて立ち、道の両側に商品をならべて商う形式であったという。首里では上市・下市の区別があって、それが道の左右に分かれて四区画になり、それぞれ扱う商品が自ずから異なっていたという。こうした秩序がどのように形成・維持されたのかも興味深いが、それは今後の課題である。

以上の推移を、那覇を例として繰り返して要約すると、次のようになる。

早くから「マチ」が那覇の中心地には成立していた。それが後に「ナファヌマチ」となり、さらに「東町市場」となって現在の「公設市場」に受け継がれてきたのである。一方、この他に多くの「マチグァー」が那覇の周辺地域に分散的に発生して、なかでも北の境（泊往還・首里往還の起点）には「カタバルマチグァー（ミンダカリマチグァー）」「トゥマイマチグァー」が、南の境（南部往還の起点）には「カチヌファナマチグァー」が発達して、周辺の農村部との結合点となっていた。

近代には、那覇の中心地から「ヤマトゥマチヤ」が発生して、本土寄留商人を中心にするまったく新しいタイプの商業活動が始まり、そこから現在の国際通に見られるような「商店街」が形成されてきた。

新しく発生した「マチヤ」の商いは、在来の「マチ」や「マチグァー」の商いが近在の農漁村との交易を基本にしていたのに対して、本土から移入した近代的な商品をもたらし、同時に、砂糖・反物・鰹節など、沖縄の特産商品の移出を独占するものでもあった。そして、「マチ」や「マチグァー」が女の領分であったのに対して、「マチヤ」は基本的に男の商売であって、担い手においても異なっていた。

以上のことを言い換えれば、南島の「町」の形成には、「マチグァー」から始まって「マチ」を経て「市場」に至る流れと、王府時代末期に発生した「マチヤグァー」を基にして、実質的には明治時代以後の寄留商人の「ヤマトゥマチヤ」の集合によって生まれた商店街とのふたつの潮流があったということである。そして、「マチヤ」の商いを担った人々は、本土寄留商人、ついで本島内各地・周辺離島からの寄留民が多かった。那覇の人々も石垣・四個の人々も「マチヤ」経営には積極的ではなかったのである。

ここで付け加えておきたいことは、本島内各地・周辺離島からの寄留民の商工民化を促したものに「間切宿」が存在する点である。

間切宿は、明治時代後期の那覇に四〇軒ほどあったといわれており、「シマ」から那覇に出てくる人々の宿泊施設であるとともに、通信基地でもあり、また移出入する商品の授受を取り次ぐものでもあって、同時に、現在の郷友会の機能と類似する部分も併せ持っていたといわれている。

以上の視点をもう一度石垣・四個に当てはめると、ここでは、空地に拓かれた「マチ」が今日の「市場」に受け継がれていく一方で、本土および本島寄留商人の「マチヤ（クヤー）」の集合が町化を促進させてきたのである。戦後は、宮古諸島や周辺離島からの移住者も加えて、「町」は埋立地に拡大して、今日の規模と広がりを持つものになった。

註

（1）『沖縄考』（『伊波普猷全集四』に集録。p四一六）において、伊波は『琉球国由来記』『琉球国旧記』を引いて、古く那覇は東村・西村の地域を意味したが、やがて若狭町村・泉崎村が加わって「那覇四町」が出来たとする。そして、これに続いて「名称から判断すると、若狭町はもっと古い時代からの外来者部落であったらしく、同書（『琉球国由来記』　引用者注）の『那覇由来記』若狭町小名の項に、トカラ小路（往昔トカラ島、当国ノ御手内之時彼辺ニ宿シタルトナリ。俗ニカク云ウゾカシ）・福町・カメゾ（徳之島の亀津と関係があろう。今ではカミヅの金城或いはカミヅグワーなどの屋号に残ってゐる）と見えてゐるのも、この辺の消息を仄かしている」と述べている。

また、東恩納寛惇によれば「此地はもと那覇町の所在で、旧記の伝ふる所に依ると造梳・轆轤・造墨等諸職人いづれも此地に於て業を始めたようで、特に轆轤は後世まで若狭町職人の専業となっている」『南島風土記』（『東恩納寛惇全集七』に集録。p三八一）とある。

（2）『球陽』に次のようにある。

諸間切百姓詐冒首里那覇泊久米村之民籍。尚敬王六年

十三年免首里泊那覇久米村居民毎名毎月丁銭二貫文己亥年□王受冊封因此府庫一空国用多欠乃取首里那覇等処百姓丁銭起自其次年至是而止。尚敬王一三年

始許士家作絵師包丁諸細工銀見船頭作事五主琉仮屋手代

按前規士作此業者賤之為百姓士亦恥之不作而貧窮者衆況今士家繁衍而輪供公事受俸之期漸漸遅延甚難為生于是不惟許作此業亦下令勧貧士修此業以治家道而備國用也。尚敬王一三年

始禁諸郡邑人為公司匠夫

諸郡邑人依其所長或為畳匠或皮匠或鼓匠或簾匠或鞍轆匠或編物匠或鐵匠或裱匠或馬鞍匠或編糸匠或縫裁匠或彫物匠或玉貫匠等以辨公用則毎其名免許丁銭矣至于是年山舎之不許為其匠夫但令首里泊那覇久米邑人恒為此業以辨公用焉。尚敬王一六年

始免首里久米村那覇泊等職人之税銭
自往昔時首里久米邑那覇泊等人恒為産業出于其市以為売買者不論男女老若皆致納税至于是年居民日増多穀食日増貴難以日度況女人多為其業堪以軫念由是許免其出税。尚敬王二一年

(3) 伊波は、「仲村梁」『沖縄考』(前掲p五二〇)において「村かれ」について述べて、若狭町村の「新村梁」に触れて「イベガマ」に立つ潟原町小(カタバルマチグァー・伊波は「潟原市小」と書く)について述べ、「漸次沖道に沿うて発展し、いつしか美栄橋まで続くようになった」と述べている。また、久茂地については、『球陽』に次のように記されている。

創久茂地邑
唐栄之東有一田圃恒播禾麦曠曠荒野無有居民但内金宮前僅有数家但那覇官所管焉康熙丁未紫金大夫金正春城間親方題請□王命営宅建邑而属于唐栄矣其地嘗有一寺名曰普門寺故叫其邑曰普門寺雍正乙卯之夏改名久茂地。尚質王二〇年

なお、雍正一三年の年号をもつ久茂地の屋敷地図が残っており、東恩納寛惇は「那覇」『南島風土記』(前掲 p三八六〜三九九)において、これを分析している。この地図には焼物製造・鍛冶屋なども書き込まれており、東恩納も「久茂地辺は、表具師・玩具製造・飾職・飛白結等を始め指物・線香製造・粉挽等に至るまで雑然としたる小職人が群居し、その住民は細工勝手(「カッテ」とは特別な技術をもつ者の意。引用者注)として知られていた」と記している。実際、久茂地のうちの深地には、明治時代以後も鍛冶屋や線香屋が並んでいた。

(4) 『那覇市史資料編二・中・七 民俗編』一九七九 那覇市企画部市史編集室。また、かつての那覇の空間構造は『那覇市歴史民俗地図—文化遺産悉皆調査報告書』那覇市教育委員会・一九八六によっても知ることができる。さらに前述の『沖縄考』において、その発展過程が分析されており、「那覇」「南島風土記」には、後述の「那覇町」「東町屋」(前掲 p三三二〜三三八)など「マチ」「マチヤ」についての要を得た記述がある。

(5) 「那覇及久米村図」 伊地知貞馨『沖縄志』所収 沖縄県立図書館蔵 別掲を参照。

(6) 前掲「那覇」『南島風土記』では「ナファヌマチ」について、次のように述べている。
現在では市役所前にその面影を留めているが、古へはその範囲規模共更に広く、今の山形屋百貨店東角から郵便局付近まで、大道を夾んで、露天商人が居流れてゐた。据筐町・小間物町・塗物町・壷屋町・米町・昆布町・芋町・野菜町・豆腐町・布町・松明町等各その物質によって名を得、魚町・肉町等の如き生物は、海岸寄りの東下りにあった。
(略)
冊封使張学礼の記事によると、天使館前に、百坪ばかりの空地があって、毎日、午後、婦女老少、筐を携へ、筥を挈げて此処に集まり貿易を為すとある。これが据筐町の事である。
(略)
要するに慶長以前に於て、小規模ながら国際都市の観を呈していた那覇町も、その後は単なる地方市場となったに過ぎないがそれも一時寥々たるものとなり、蔡温以後漸く体裁を整えて来たもののようである。

(7) 照屋正賢「首里王府の風水受容について」『沖縄民俗研究』一一・一二合併号 一九九二 沖縄民俗学会 p八三〜一〇四

(8) 『球陽』に次のようにある。
首里市地南創置小店竝広闢市南地。尚敬王三年

(9) 『球陽』に次のようにある。
始許人宅以家為垣竝開店
自往昔時本国人宅或築石為垣或栽竹為囲而不許家以為垣竝開店貿易至于是年始免開店竝家垣。尚敬王一六年

これは、東恩納が「那覇」『南島風土記』p三三四において、周煌の記録を紹介した上で、次のように述べている事と関わると思われる。

天明五年（一七八五年・尚穆王三四。引用者注）頃の親見世日記に依ると、若狭町西村等の住民が屋敷の石垣を取払って二間三間の店舗を開き度いとの請願が出てゐるが、この前後から町屋商売等も次第に殖えて来たものと見える。

（10）「那覇市街之図」『沖縄間管内全図』一八八五年（明治一八年）沖縄県立図書館蔵

この地図には師範学校・警察署・病院の南の空地に「市場」があり（「ナファヌマチ」である）、この他に潟原と泊高橋に「市場」と記入されており、また、「豚市」が上之蔵通りの北に書き込まれている。さらにこの「豚市」の北、辻村の外れの海岸に「屠豚場」が記入されている。この「豚市」について「那覇」『南島風土記』p三二三で次のように述べている豚市である。

上の蔵、石門通から前道に曲がる処、今の新天地の東角に在った。此の辺一円は最近までも、こんもりした「ウスク」の杜で、その杜の中で仔豚の市が立ち、俗に仔豚町（ウワーグワーマチ）と唱えてゐた。（中略）食用肉の市場も、元は同じ丘続きの辻毛にあったが、屠殺場は裏手の海浜にあった。

（11）註3において「雑然としたる小職人が群居し、その住民は細工勝手として知られていた」とされる久茂地（なかでも深地）や、「カタバルマチグァー」の立つ新村梁などの、東に広がった新開地は主に小商工民の集住地区となっていったが、これは同時に中部・首里方面の農村との関わりを強化する方向に働いたものと考えられる。

（12）糸満の「マチ」については、『沖縄縣取調調書附図』（年代不詳。明治期前半？東京大学理学部人類学教室図書室蔵）に含まれる「糸満村戸数早見表」において、「仲村」の中心地域に「市場」と記入されており、後に糸満市場となった地域に符号する（糸満市史編集室・金城善氏の教示による）。

宮古・平良の「マチ」は、『平良市史七・資料編五（民俗・歌謡）』によると、「ウヤグスの坂の上あたりにあったが、その発生時期は不明であるという。明治時代末期に、現在の下里公設市場の周辺に肉屋ができて、久松から来る魚売りがあつまって賑わうようになると、こちらに移動して、現在に引き継がれている（p一五六）。

（13）西里喜行『沖縄近代史研究―旧慣温存期の諸問題―』一九八一　沖縄時事出版
同『近代沖縄の寄留商人』一九八二　ひるぎ社　などを参照。

（14）『旧那覇地図』昭和石版印刷所　年代不詳。沖縄県立博物館蔵。

この地図には個別の商店等が総計二〇〇件程度記載されている。十分読み取れない部分もあるが、三三～三四店舗が沖縄県人名を持つ。したがって、過大に見積もっても、全店舗の五分の一程度であったことになる。沖縄県人名をもつ店舗と思われるものは以下のとおりである。

与那嶺履物店・金城看板店・アラカキ自転車・島袋医院・赤嶺・具志・伊集・大城〇〇・照屋洋服店・沖元履物店・許田文具店・我喜屋蒲鉾店・嶺山商店・外間文具店・屋宜商店・テルヤ海産物・宮城商店・宇地嶺製薬所・渡名喜火薬店・尚泰商会・金城指物店・かみや〇〇〇・仲村梁呉服店・屋宜肥料店・友寄仕立屋・当真タクシー・仲宗根仕立屋・友利歯科・比嘉洋服店・料理京屋・高良菓子店・照屋まんじゅう・大田写真館。この他に新聞社・組合などがある。

（15）前掲『平良市史七・資料編五（民俗・歌謡）』によると、宮古・平良の場合には「マチヤ」の集住地域を「クヤモー（小屋毛）」と称して、船着場である漲水の浜に接した空地（モー）一帯を指した。ここに小屋掛けの店がならんでいたが、その小屋は、ススキやヤンバル竹で囲い、薦を掛けただけの粗末なものであったという。そして、これらの「クヤー」は寄留商人の経営であった。本島からの寄留者はほとんど那覇の出身者で、本土からの者は鹿児島県からが多かったという（p一五六）。本島出身者の当初の生業は牛馬の買継業・泡盛製造などが多かったようである。

（16）『沖縄県統計書』沖縄県立図書館マイクロ本

(17) 『明治二十七年　第二類　庶務書類綴（下巻）農商務技手原照ヨリ依頼ニ係ル前後取調類目録』「八重山喜舎場家資料三八」石垣市立図書館マイクロ本

(18) 『塙忠雄作成八重山島村絵図』恩故学会所蔵。
塙保己一の曾孫として一八六三年に生まれた塙忠雄は、一八八四年（明治一七）より農商務省に勤務、一八八八年（明治二一）に沖縄県属に出向して那覇に派遣され、次いで一八九〇年（明治二三）一月には八重山島役所に転勤となり、同年一二月に県属を辞した。その後、八重山で製糖業・木材伐採業・楊梅皮業・獣骨化事業などの企業化を試み、西表島・南風仲間地方の開拓をもくろんだ。この事業には中川寅之助なども関わっていたが成功せず、一八九六年（明治二九）には東京に帰京している。したがって、これらの「村絵図」は塙が八重山に在住していた間に、開発事業を目的として作成させたものらしく、大変に精緻で、当時の八重山の村落の様子を知る上で貴重な資料となっている。塙忠雄については『恩故叢誌』二六―塙忠雄先生五〇周記念誌―一九七八　恩故学会　に詳しい。そのなかで、斉藤政雄「塙忠雄氏小伝」は塙忠雄の「渡琉日記」（恩故学会蔵）を引きながら、その沖縄・八重山時代を紹介している。

(19) 別掲の図版を参照。

(20) 前掲『沖縄近代史研究―旧慣温存期の諸問題』「第二論文　旧慣温存期の経済過程」に詳しい。

(21) 「開墾事業の状況（続）」『琉球新報』一九〇五（明治三八）八月五日　『石垣市史』史料編・近代四・新聞集成一・一九七九　石垣市役所　p二五三

(22) 一八九五年（明治二八）に「沖縄地方制度改正の件」を閣議提出。一八九六年沖縄県区制・郡編成の勅令公布。一八九七年「沖縄県間切島吏員規程」を公布、など。

(23) 「八重山の開墾に就き」『琉球新報』一九〇四年（明治三七）三月三〇日　前掲『石垣市史』史料編・近代四・新聞集成一　p二二〇

(24) 「八重山群島（十五）」『琉球新報』一九〇五年（明治三八）九月五日　前掲『石垣市史』史料編・近代四・新聞集成一　p二六四

(25) 糸満漁民について書かれたものは多いが、上田不二夫『沖縄の海人　糸満漁民の歴史と生活』タイムス選書　沖縄タイムス社　一九九一　が総轄的な記述で要を得ている。

(26) 一九五一年（昭和二六）に群島政府が移民計画を策定、一九五二年（昭和二七）に「政府計画移民」が八重山へ入植活動を始める。一九五四年（昭和二九）五月に「計画移民」三八戸一一六名が西表島古見に移住。六月には一〇七戸一七一名が続く。

(27) 郷友会墓地については、稿をあらためて報告するつもりである。

(28) 前掲『沖縄近代史研究―旧慣温存期の諸問題―』同『近代沖縄の寄留商人』を参照。

(29) 一九九五年一月一五日付の『おきなわの声』（東京沖縄県人会発行）には、新年の挨拶に「関東島尻会」「東京那覇会」「中央糸満郷友会」等の沖縄本島の組織とともに、宮古島の「関東下地郷友会」「関東城辺郷友会」がならび、八重山のものに「関東宮良郷友会」「東京八重山郷友会」「東京大浜郷友会」「東京竹富郷友会」「東京西表郷友会」「東京与那国郷友会」がある。
なお、本土における沖縄県出身者と県人会組織（郷友会）について冨山一郎『近代日本社会と「沖縄人」「日本人」になるということ』日本経済評論社　一九九〇があり、主として労働社会学の観点から論じている。
また、沖縄社会における郷友会については、石塚昌家『郷友会社会―都市のなかのムラー』ひるぎ社　一九八六、『郷友会』琉球新報社編　琉球新報社　一九八〇などがある。

(30) 別掲の図版を参照。

(31) 『琉球新報』一九〇一年（明治三四）四月二日広告　前掲『石垣市史』史料編・近代四・新聞集成一・p一二四に、「三ヵ月以上一〇ヵ月以内の月賦」で売るとして、「大川に出張」となっている。

(32) 『あわもり―その歴史と文化―』沖縄県立博物館友の会　一九九二　p五〇。「各離島間の輸出入」『琉球新報』一九〇二年（明治三五）九月一五日　前掲『石垣市史』史料編・近代四・新聞集成一　p一五三・一五四には前年の開運社扱いの各離島への移出を掲載しているが、八重山について金額の大きなところを拾ってみると次のようになり、泡盛移入量の大きさが知られる。

泡盛	一六、七〇〇円
米穀	三、六五〇円
油類	一、一三六円
塩	一、一一一円
素麺	八七〇円
板類	八四〇円
昆布	六三六円
刻み煙草	五二五円

(33) 別掲の図版を参照。

（国立歴史民俗博物館　民俗研究部教授）

The Emergence of Machi [town] in the Okinawa Islands

ASAOKA Koji

This paper examines the emergence of commercial districts in the development of the "city" in the modern sense of the term in the southernmost islands of the Japanese archipelago. On the main island of Okinawa, where a monarchy emerged comparatively early in history and which became a locus of international trade, places like Shuri, Naha, and Tomari quickly acquired the characteristics of the "city", but this was not accompanied by the development of so-called commercial districts. What has been called *machi* in the Okinawan dialect resembles what is known as *ichi* [marketplace] on the mainland of Japan, and their spontaneous circumstances continued even after they developed as official marketplaces. We know this from the changes that occured in the "Nafwa-nu-machi", which have been passed down in present-day Kainan and in the vicinity of the Nōren market [agricultural cooperative market]. The *machi* markets have been basically the world of women.

There have been *machi* on a smaller scale that are distinguished from the larger-scale *machi*, using the name *machigwa. There were a number of machigwa* in Naha, where ten or so merchants would gather in the early morning or the evening, that were clearly distinguished both in scale and organization from the *machi* thronged by very large numbers of people.

The birth of shops as the focal point of commercial activity, on the other hand, is relatively recent in Okinawa. What are known as *shōten* [shop] in standard Japanese, called *machiya* in Okinawan dialect, became established mainly with the arrival of modern merchants from the mainland, and were therefore called by the name *Yamato* [meaning mainland] *machiya*. Businesses run by Okinawans based in such *machiya* became active after the Pacific War when the islands were under American control.

There are also *machiyagwa*, that means small-scale *machiya*, which are simple sheds built by tearing down part of the stone walls surrounding houses for the sale of some kind of daily articles. Most of these have been run by women.

This paper traces the developmental process of this kind of commercial activity through concrete case studies in Naha and Ishigaki-Shika [the center of Ishigaki-city] where *machi*, *machigwa*, *machiya*, *machiyagwa* have existed.